

# 甲田南遺跡

— 診療所建設に伴う発掘調査概要報告 (KDS88-1) —

2022. 9

富田林市教育委員会

## 例 言

1. 本書は、昭和63（1988）年度に富田林市甲田三丁目（調査当時は大字甲田）において、診療所の建設に伴い実施した甲田南遺跡の発掘調査の成果をまとめた報告書である。調査区の略号はKDS88-1である。
2. 現地調査は、富田林市教育委員会社会教育課職員（当時）の中辻 亘が担当し、昭和63（1988）年10月19日から12月7日まで実施した。
3. 現地調査には、南 元康、田川 友美の協力を得た。また、遺物の整理作業は、田川 友美、廣野 智子、山本 恭子、岩子 苑子、佐藤 美和子、西澤 寿子、沼間 恵子、原田 亮子、前野 美智子、山本 節子が行った。
4. 現地調査から長い年月が経過したが、令和3（2021）年度に入って編集に着手した。編集作業は青木 昭和（富田林市教育委員会文化財課）が行い、本書刊行をもって調査が完了した。
5. 本書の執筆は、各々文末に記すものがあつた。なお、編集にあたって、執筆者の文章を尊重したが、若干の文言修正を行っている。
6. 出土遺物及び調査時の記録類は、富田林市教育委員会文化財課で保管している。広く活用されることを望む。
7. 調査にあたって、土地所有者をはじめ関係各位のご理解、ご協力を得た。また、栗田 薫氏から格別の援助を受けた。ここに記して感謝の意を表します。

## 凡 例

1. 本書に用いる遺構名称は、SB（掘立柱建物）、SD（溝）、SK（土坑）、SX（落ち込み）、SP（ピット）である。  
なお、掘立柱建物を構成する柱穴およびその掘りかたは、pで表示しピットと区別している。
2. 遺構一覧表に併記した略号のうち「LN」は発掘調査時に使用したもので、LN1～LN6は各層の堆積順序（Layer Number）を示し、LN11以降は、それぞれ個別の遺構の位置（Locus Number）を示している。出土遺物にはこの略号を用いて注記し、出土位置を記録している。
3. 摂図の方位は磁北を示し、縮尺は図中に記載した。標高は東京湾平均海面（T.P.）を示している。
4. 文中の住所表記は届出があった当時のものであり、現在と異なる場合がある。

## 目 次

### 例言・凡例

第1章 昭和63年度調査の概要	1
第2章 歴史的環境	3
第3章 調査に至る経過	4
第4章 調査成果	4
第1節 調査の方法	4
第2節 遺構と遺物	4
第5章 まとめ	19

## 表 目 次

表1 発掘調査一覧表	1
表2 遺構規模および出土遺物一覧表（その1）～（その5）	20～24
表3 遺物観察表（その1）～（その9）	25～33

## 挿図目次

第1図 昭和63年度調査遺跡位置図	2
第2図 調査地位置図	3
第3図 調査区平面図・断面図	5・6
第4図 溝1, 土坑7・8・10・12出土遺物	8
第5図 土坑13・14・15・27出土遺物	10
第6図 挖立柱建物1・3, ピット出土遺物	14
第7図 落ち込み1・2出土遺物	15
第8図 包含層出土遺物（その1）	16
第9図 包含層出土遺物（その2）	17
第10図 包含層出土遺物（その3）	18

## 図版目次

図版1 (上) 調査区遠景航空写真（調査前）	(下) 調査区全景航空写真
図版2 (上) 調査区近景	(下) 調査区近景
図版3 (上) 調査区西半部近景	(下) 調査区東半部近景
図版4 (上) SK14遺物出土状況	(下) SK14円礫出土状況
図版5 (上) SK27遺物出土状況	(下) SK2馬齒出土状況
図版6 溝・土坑出土遺物	
図版7 土坑, ピット, 包含層出土遺物	
図版8 包含層出土遺物	

## 第1章 昭和63年度調査の概要

昭和63（1988）年度には、表1および第1図に掲げた21件の発掘調査を実施し、その大半は小規模な確認調査であった。本書では、このうち甲田南遺跡（13）の発掘調査について記述する。

（中辻）

表1 発掘調査一覧表

No	調査期間	遺跡名	所在地	調査面積(m <sup>2</sup> ) (対象面積)	調査原因	調査内容
1	S63. 5. 12	西板持遺跡	大字西板持	5 (341)	個人住宅	1m×5mのトレンチを2か所機械掘削。 遺構・遺物なし。
2	S63. 5. 13	喜志西遺跡	喜志町五丁目	3 (500)	共同住宅	1m×3mのトレンチを機械掘削。 地山上に基礎を布設するよう指導。
3	S63. 6. 1 ～ 6. 11	富田林 寺内町遺跡	谷川町	84 (884)	店舗付 共同住宅	84m <sup>2</sup> を機械掘削及び人力掘削。 井戸、ピット検出。
4	S63. 6. 17	中野北遺跡	中野町一丁目	5 (231)	個人住宅	1m×5mのトレンチを機械掘削。 地山上に基礎を布設するよう指導。
5	S63. 6. 27	新家遺跡	大字甲田	1.5 (260)	個人住宅	1m×1.5mのトレンチを機械掘削。 遺構・遺物なし。
6	S63. 6. 28	毛人谷遺跡	寿町三丁目	5 (95)	個人住宅	1m×5mのトレンチを機械掘削。 遺構・遺物なし。
7	S63. 7. 7	新家遺跡	大字新家	5 (605)	集会所	1m×4mのトレンチを機械掘削。 地山上に基礎を布設するよう指導。
8	S63. 7. 25	中野北遺跡	中野町三丁目	10 (687)	共同住宅	1m×10mのトレンチを機械掘削。 遺構・遺物なし。
9	S63. 7. 26	富田林 寺内町遺跡	富田林町	2 (210)	個人住宅	1m×2mのトレンチを人力掘削。土坑、水路石 粗検出。地山上に基礎を布設するよう指導。
10	S63. 8. 2	毛人谷遺跡	寿町二丁目	3 (299)	個人住宅	1m×3mのトレンチを機械掘削。 地山上に基礎を布設するよう指導。
11	S63. 8. 31	毛人谷遺跡	寿町二丁目	3 (122)	個人住宅	1m×3mのトレンチを機械掘削。 遺構・遺物なし。
12	S63. 10. 3	西板持遺跡	大字西板持	5 (922)	店舗	1m×5mのトレンチを機械掘削。 地山上に基礎を布設するよう指導。
13	S63. 10. 19 ～ 12. 7	甲田南遺跡	大字甲田	915 (1,509)	診療所	本書掲載
14	S63. 10. 20 ～ 10. 22	富田林 寺内町遺跡	本町	2 (85)	個人住宅	1m×2mのトレンチを人力掘削。 ピット検出。地山上に基礎を布設するよう指導。
15	S63. 10. 21	富田林 寺内町遺跡	富田林町	1.4 (89)	個人住宅	0.7m×2mのトレンチを人力掘削。 ピット、土坑、石組検出。地山上に基礎布設。
16	S63. 11. 8	喜志西遺跡	旭ヶ丘町	5 (107)	店舗付 共同住宅	1m×5mのトレンチを機械掘削。 遺構・遺物なし。
17	S63. 11. 30	西板持遺跡	大字西板持	5 (770)	店舗	1m×5mのトレンチを機械掘削。 地山上に基礎を布設するよう指導。
18	S63. 12. 1	中野遺跡	若松町五丁目	2 (120)	宅地造成	1m×2mのトレンチを機械掘削。 地山上に基礎を布設するよう指導。
19	S63. 12. 1 ～ 12. 7	富田林 寺内町遺跡	富田林町	18 (103)	倉庫付住宅	18m <sup>2</sup> を人力掘削。 ピット、土坑を検出。
20	S63. 12. 12	錦織廃寺	大字錦織	2 (392)	共同住宅	1m×2mのトレンチを2か所機械掘削。瓦溜 構造を検出。盛土内に構築物を布設するよう指導。
21	H元. 1. 31	新堂南遺跡	昭和町二丁目	20 (1,933)	倉庫	1m×20mのトレンチを機械掘削。遺構・遺物なし。



第1図 昭和63年度調査遺跡位置図

## 第2章 歴史的環境

甲田南遺跡は、富田林市のほぼ中央を南から北に貫流する石川の左岸に形成された河岸段丘上に位置する遺跡で、弥生時代中期の大集落跡として周知されている。しかしその発見は新しく、昭和55（1980）年に富田林市下水道課の実施した下水道本管の設置工事に際して出土した大量の弥生土器と古代の蔵骨器が、遺跡発見の端緒とされている。その後、大阪府教育委員会によって国道309号築造に先立つ大規模な調査がおこなわれ（第2図），弥生時代中期の竪穴建物や土器棺墓をはじめとする多数の遺構が発見された。その結果、甲田南遺跡は、喜志遺跡や中野遺跡と並ぶ、弥生時代中期の大集落跡として多くの注目を集めることになった（今村1982, 小林1985）。さらに今回の調査の直前におこなわれたマンション建設に先立つ調査（KDS88）でも（第2図），弥生時代中期の竪穴建物や方形周溝墓などが検出され、益々、弥生時代中期の大集落跡としての姿が補強されている。

一方で、同じく遺跡発見の端緒となった平安時代の蔵骨器の存在は、正式報告書が未刊行であったことも災いして広く知られる事はなかった。その後、昭和60（1985）年に『富田林市史』の第1巻の中で紹介されるが（北野1985）、弥生時代の集落跡としての高い評価の前に、残念ながら、それほど大きく注目されることはない。

この蔵骨器は土師器製の甕で、胴部から下だけが残っていたが、その底部には「和同開珎」が複数枚置かれていたことが分かっている。ただし骨は出土していない。なお、昭和55（1980）年に大阪府教育委員会が、大阪府土木部からの受託事業としておこなわれた発掘調査でも（第2図），胴部下半のみ残存した土師器甕の底部に、土師器高坏坏部が正立状態で置かれていたことが報告されている（尾上1981）。また、弥生時代の遺構や遺物の陰に隠れて、それほど注目されていない



第2図 調査地位置図

いものの、大阪府教育委員会による国道309号線に先立つ調査でも土師器甕が2例確認されている（今村1982、小林・河内1984）。

このようにみていくと、甲田南遺跡の一帯には平安時代の火葬墓も含めた古墓の存在が想定できる。つまり、弥生時代中期の大集落としての甲田南遺跡だけではなく、古代の甲田南遺跡の姿も考える必要のあることを示唆している。

なお、昭和55（1980）年の大阪府教育委員会による調査は、近鉄長野線の高架工事に先立ち、南北に長く設定された調査区であるが、この時の調査では縄文時代から中世にかけての各時期の遺構・遺物も検出されている。（栗田）

### 第3章 調査に至る経過

昭和63（1988）年9月16日、大字甲田（現在は甲田三丁目）に、鉄筋3階建ての診療所建設に伴う発掘届出書が提出された。調査区の位置から考えて、遺跡の南西部への広がりを確認する絶好の機会でもあった。

調査地前の状況は畑地で、同年10月12日に実施した事前調査の結果、現況面から0.63～0.96m下で遺構が確認されたことから、本格的な発掘調査が必要となり、建物と浄化槽部分の約915m<sup>2</sup>を調査対象とすることになった（第1図）。（中辻）

### 第4章 調査成果

#### 第1節 調査の方法[第3図]

調査では、調査区の南壁で土壟断面図を作成した。調査前は段状に2枚で構成された畑地で、調査区のほぼ中央を境に西寄りが高く、東寄りで低かった。

調査は地山面までを機械掘削し、地山面で遺構の検出をおこなった。

（中辻）

#### 第2節 遺構と遺物[第3～10図、図版1～8、表2・表3]

地山面で検出された遺構と出土遺物は、表2に示したとおりである。また、図示した遺物の個別の観察は表3に示した。以下に遺構別にその特徴を記述する。

##### 溝1（SD1）[第3図・第4図（1～9）、図版6]

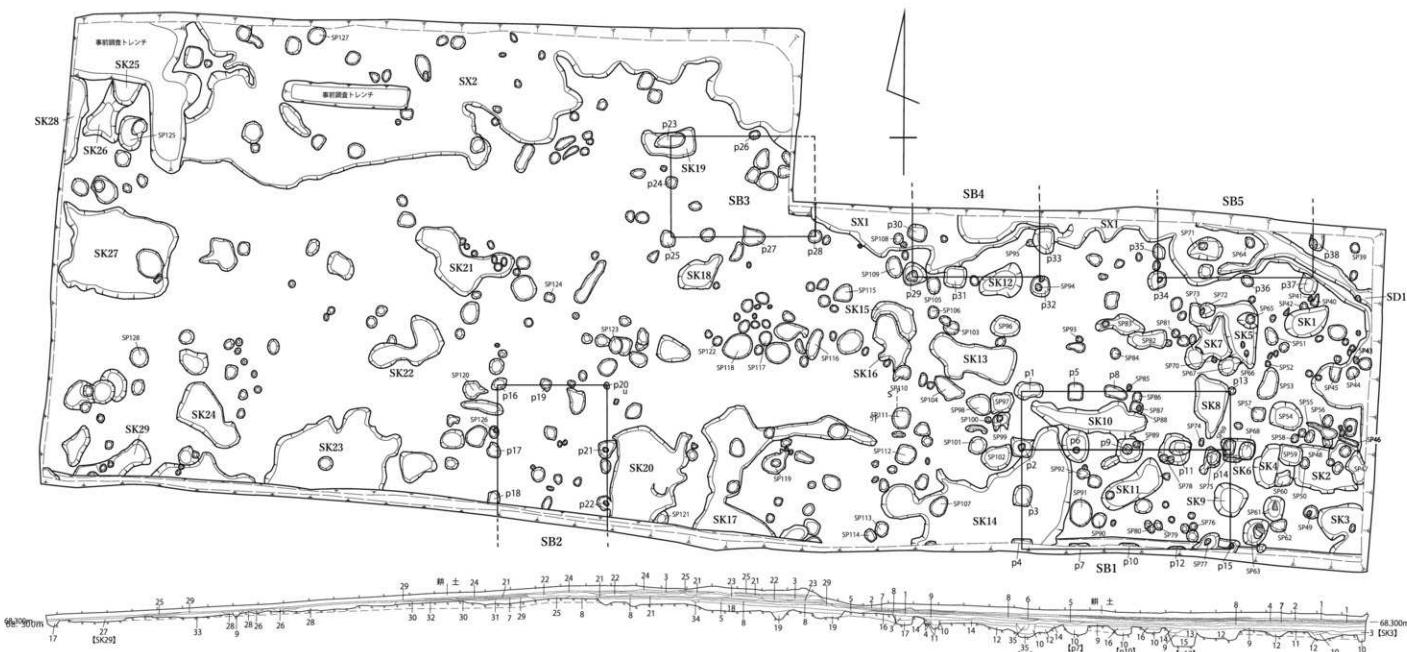
溝1は北西から南東方向に走る溝で、調査区の北東角で検出した。幅0.75m、深さ0.35mを測り、長さ4.75m分だけが調査区内で検出されたが、両端とも調査区外に延びる。

埋土からは弥生土器、須恵器、土師器が出土している。

弥生土器は、底部片が1点と器種不明の小破片が3点出土している。

須恵器は蓋坏、高坏、高台片、甕あるいは壺体部片が出土している。出土したすべての蓋坏は、図示した坏蓋（1）や坏身（2）と同じ形態である。すなわち坏蓋は天井部と口縁部を分ける稜や凹線が認められないもの、坏身は口縁部の立ち上がりが内傾して短く立ち上がるもので、とともにTK209型式に該当する。高坏は図示した1点（3）だけで、太い脚柱部をもち、長方形の透かしが3方向に穿たれた、所属時期がTK43からTK209型式に比定できるものである。高台片は1点出土したが、いわゆる坏身にみられる高台ではなく、鉢あるいは壺などに付く若干大型の高台である。甕あるいは壺の体部片はすべて小破片である。

土師器は坏、皿、高坏、甕などが出土している。坏は内面に正放射状の暗文が施されたものと（4・5、図版6）、暗文の認められないものがある。皿は2点あるが、ともに口縁端部は巻き込むよう丸くおさまり、内面には暗文が認められない。坏より皿の方が、若干時期は新しい。高坏は坏部と脚部がそれぞれ1点ずつ出土しているが、坏部（6）は内面に正放射状の暗文が施



- |              |                         |                       |                          |
|--------------|-------------------------|-----------------------|--------------------------|
| 1. 灰褐色土      | 11. 暗黄褐色粘质土             | 21. 黄灰色土              | 31. 灰褐色土                 |
| 2. 褐灰色土      | 12. 暗灰褐色粘质土以黄色粘质土为区块状混入 | 22. 暗灰黄褐色混碳粘质土        | 32. 深黄灰褐色土               |
| 3. 灰黄褐色土     | 13. 黄灰褐色土               | 23. 灰黄褐色土中暗黄灰褐色粘质土为混入 | 33. 灰黄褐色砂质土              |
| 4. 灰灰褐色粘质土   | 14. 暗灰褐色粘质土             | 24. 茶灰色土              | 34. 深黄褐色土                |
| 5. 深灰黄褐色粘质土  | 15. 暗黄灰褐色土              | 25. 灰色土               | 35. 暗灰黄褐色粘质土中黄色粘质土为区块状混入 |
| 6. 灰褐色砂质土    | 16. 暗黄褐色粘质土             | 26. 深灰黄褐色粘质土          |                          |
| 7. 灰黄色砂质土    | 17. 暗灰黄褐色土              | 27. 深灰黄褐色砂质土          |                          |
| 8. 黄灰色混砂粘质土  | 18. 深灰黄褐色混碳土            | 28. 深灰褐色土             |                          |
| 9. 暗灰褐色土     | 19. 暗灰褐色混碳粘质土           | 29. 黄灰色粘质土            |                          |
| 10. 暗灰黄褐色粘质土 | 20. 黄灰褐色砂质土             | 30. 弱灰黄色粘质土           |                          |

第3図 調査区平面図・断面図

されている。脚部（7）は裾部のみ残存しているが、出土した坏部とは直接接合しないものの、同一個体の可能性も高い。甕は9点確認されているが、体部残存のものは、内面がヘラ削り調整のもの（8・9）と刷毛目調整のものがある。土師器の所属時期は、図示したものでみると、ほぼ飛鳥II期に比定できるが、皿にみるように、平城宮期に比定すべきものもあることは記述しておかなければならぬ。

以上から須恵器や土師器の所属時期が7世紀初頭から8世紀代のものに限られるため、溝の埋没時期は8世紀代と想定できる。

#### 土坑1（SK1）[第3図]

調査区東部の北側で検出された。

埋土からは土師器が出土している。

土師器には、皿のほか、器種不明の小破片が出土している。皿は内面に暗文の認められないもので、口縁端部は巻き込むように丸くおさまる。その特徴から8世紀代のものに比定できる。

#### 土坑2（SK2）[第3図]

調査区南東部で検出された。

埋土から須恵器、土師器、鉄片が出土している。

須恵器は高台のある坏身1点と小破片が出土している。土師器は皿以外、小破片で、器種は分からぬ。皿は内面に暗文が施されたもので、口縁部は巻き込むように丸くおさまる。須恵器、土師器とも8世紀代のものに比定できる。鉄片は1点あるが、鉄片という以外、何も分からぬ。

#### 土坑3（SK3）[第3図]

調査区南東部角で検出された。

埋土から須恵器と土師器が出土している。

須恵器は破片が3点認められるだけである。土師器は、内面に正放射状の暗文が施された坏が1点と小破片が19点認められる。所属時期は8世紀代であろう。

#### 土坑4（SK4）[第3図]

調査区南東部で、土坑2（SK2）に西接して検出された。

埋土から須恵器と土師器が出土している。

須恵器は小破片が1点で器種は不明である。土師器は坏と皿が出土している。ともに暗文は認められない。所属時期は8世紀代であろう。

#### 土坑5（SK5）[第3図]

調査区の東部、中央より北側で検出された。

埋土からは土師器が出土しているが小破片のため、器種、所属時期ともに不明である。

#### 土坑6（SK6）[第3図]

調査区南東部で、土坑4（SK4）の西側で検出された。

遺物は出土していない。

#### 土坑7（SK7）[第3図・第4図(10)]

調査区の東部、中央より北側で土坑5（SK5）に西接して検出された。

埋土から須恵器、土師器、黒色土器が出土している。

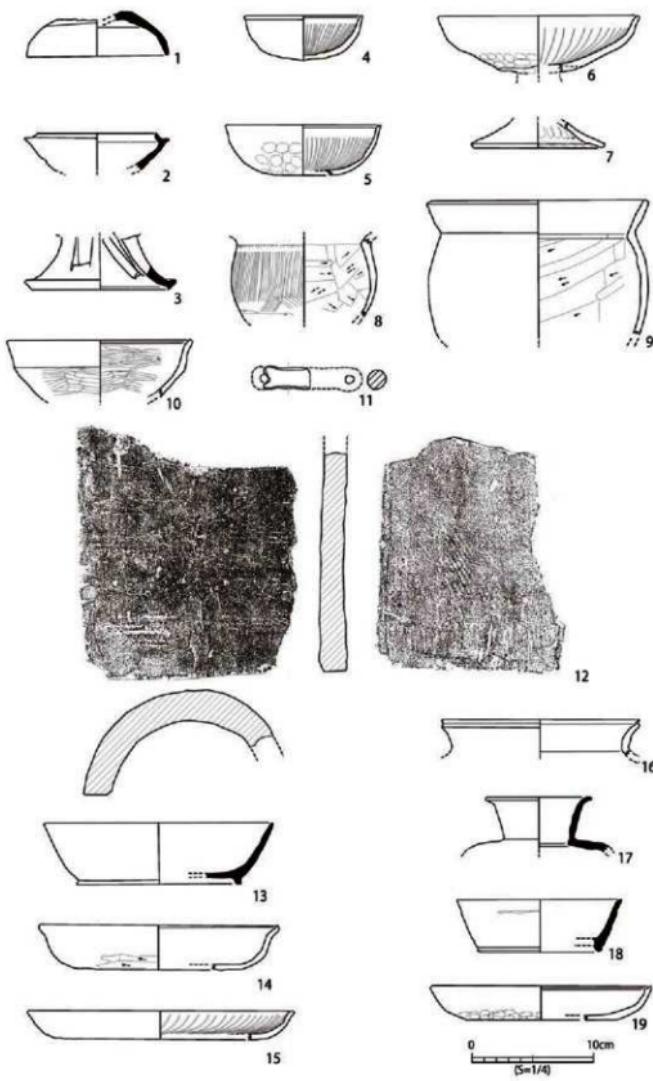
須恵器は甕の口縁部片が1点のほかに、小破片が13点出土した。土師器は長胴の羽釜の鋸部片が1点と、高坏の裾部片が1点、甕の口縁部片が3点と小破片が出土している。黒色土器碗は図示したもの（10）以外にも、類似する破片がほかに1点出土している。所属時期は8世紀以降であろう。

#### 土坑8（SK8）[第3図・第4図(11・12), 図版6]

調査区南東部、中央寄りで検出された。

埋土から土鍤（11）1点と丸瓦（12）1点が出土している。

土鍤は土師質で、扁平な長方形形状のものである。長さの半分しか残存していないが、両端付近に円孔が穿たれていたと推測できる。丸瓦は筒状の胴部の形状からみて、おそらく玉縁式の丸瓦



第4図 溝1, 土坑7・8・10・12出土遺物

で、凸面に縄目叩き目、凹面に布筒の反映痕が認められる。ともに所属時期は不明である。

#### 土坑9 (SK9) [第3図]

調査区南東部で検出された。

埋土から須恵器と土師器が出土している。

須恵器は坏身が2点出土している。1点は口縁部に立ち上がりの認められるもの、ほか1点は、立ち上がりはみられず、外傾するものである。土師器は小破片のため器種は不明である。須恵器の所属時期は7世紀末から8世紀代であろう。

#### 土坑10 (SK10) [第3図・第4図(13~17)]

調査区南東部、ほぼ中央で検出された。掘立柱建物1(SB1)の柱掘りかたによって一部潰されている。

埋土から須恵器と土師器が出土している。

須恵器は坏身2点と壺1点である。図示した坏身(13)は高台が付くが、ほかの1点は底部が欠損のため高台の有無は不明であるものの、口縁部から体部にかけての形態は類似している。壺(17)は平城宮の分類で壺とされているものである。このほかに小破片が3点出土した。土師器は坏が4点、皿が6点、壺が1点、甕が1点出土している。坏は底部まで残存していたものは図示したもの(14)だけであるが、ほかの3点も口縁部の形態は類似する。皿も底部まで残存しているものは4点あり、すべて図示したもの(15)と同じく内面に正放射状の暗文が施されている。ほかの2点は残りが悪く、暗文の有無は分からぬ。甕は図示したもの(16)だけである。甕は口縁片である。このほかに器種不明の破片が40点ほど出土している。所属時期は8世紀代であろう。

#### 土坑11 (SK11) [第3図]

調査区南東部で検出された。

遺物は出土していない。

#### 土坑12 (SK12) [第3図・第4図(18~19), 図版6]

調査区中央部東寄りのほぼ北側で検出された。掘立柱建物4(SB4)の柱掘りかたを1か所潰している。

埋土から須恵器、土師器、瓦器、鉄片が出土している。

須恵器は坏身4点と器種不明の破片が3点出土している。坏身で底部まで残存の2点は、ともに図示したもの(18)と同じ形態をもつ。ほかの2点については高台の有無は分からぬものの、口縁部から体部にかけての形態はやはり図示したものと同じである。土師器は坏が3点、皿が6点、高台部の破片1点、長胴の鍔釜の鍔部片1点、甕3点がある。ほかに器種の特定できない破片が34点あるが、うち3点に暗文、2点に刷毛目が認められる。坏は2点あるが、ともに暗文は施されていない。皿は6点あるが、図示したもの(19)以外に、正放射状の暗文の施されたものが4点認められる。高台部片は、皿に付されていた可能性が高い。鍔釜は生駒西麓産の胎土をもつものである。瓦器は碗の口縁部片が1点あるが、底部が欠失しているため時期の確定ができない。鉄片は1点出土している。

瓦器以外の遺物の所属時期は8世紀代のもので占められるが、1点とはいえ瓦器の出土からみて中世頃に埋没したと考えるべきであろう。

#### 土坑13 (SK13) [第3図・第5図(20~23)]

調査区中央部東寄りのほぼ中央で検出された。

埋土から須恵器、土師器、製塙土器、瓦が出土している。

須恵器は坏蓋1点、坏身4点が出土している。坏身はすべて図示したもの(20)と同じ形態である。坏蓋は扁平な天井部に宝珠つまみがつく形態であるが、つまみは欠失している。すべて8世紀代のものである。土師器は坏15点、皿6点、鍔釜1点、甕5点のほかにも高台部片などが出土地している。坏は口縁端部を巻き込んで丸くおさめるものが多い。大半は暗文が施されていないが、1点だけ螺旋状の暗文が施されたものがある。

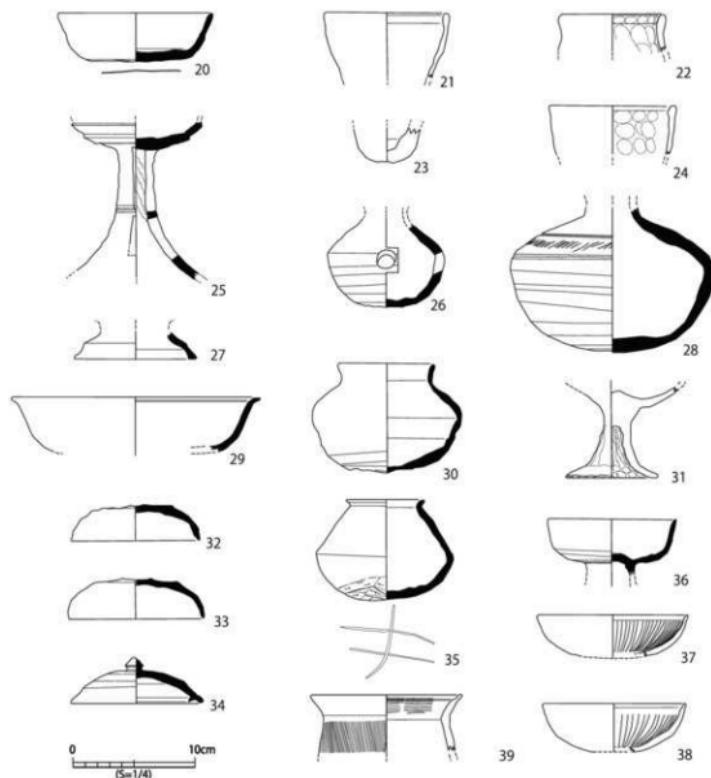
皿も暗文が施されたものはない。1点だけ確認されている鉢釜は、生駒西麓産の胎土をもつ長胴の鉢釜の鉢部片である。製塙土器は図示した3点(21~23)のほかに2点ある。瓦は丸瓦で、玉縁部分の破片である。

#### 土坑14 (SK14) [第3図・第5図(25~31)・図版4(上・下), 図版6]

調査区中央部東寄りの南端で検出された。掘立柱建物1(SB1)の柱掘りかたによって一部潰されている。土坑内には円礫が散らばっていたが、用途は不明である。

埋土からは土器と須恵器が出土している。

須恵器は壺蓋、坏身、高坏、はぞう、壺、盤が出土している。壺蓋はすべて丸い天井部からなだらかに下る口縁部をもち、端部は丸くおさまる形態のものが確認されている。坏身は、口縁部にやや内傾する立ち上がりをもつものと、体部から外傾して開き、そのまま端部で丸くおさまるものがある。高坏(25)は1点で、いわゆる長脚2段透かしのものである。はぞう(26)は1点で、中央寄りやや上に肩部をもつ。円孔は肩部にかかる。壺は4点あるが、体部だけが残る(28)と高台部(27)は長頸壺と推測できる。ほかの2点は短頸壺であるが、口縁部は若干外傾するもののほぼ直立するもの(30)と外反するものがある。



第5図 土壙13・14・15・27出土遺物

盤(29)としたものは1点あるが、実際のところは高坏の大型品との区别はついていない。土師器には坏、皿、高坏、甕のほかに把手片も出土している。坏は正放射状の暗文が施されたものもあるが、暗文のないものもある。皿は残りが悪い。高坏(31)は1点で、脚部内面に絞り目と裾部内面に指頭压痕の残るものがある。甕も残りが悪いため、全体の形状は分からぬ。把手は1点出土している。遺物の所属時期は7世紀代のものが圧倒的に多いが、8世紀代のものも出土している。

#### 土坑15 (SK15) [第3図・第5図(24)]

調査区中央部の北側で検出された。

出土遺物は少なく、土師器と製塙土器が出土している。

土師器は坏が2点、皿が1点、甕が1点出土している。坏のうち1点は内面に正放射状の暗文が施されているが、ほかの1点はヨコナデ調整が施されているだけである。皿も暗文は施されていない。製塙土器は図示した1点(24)のほかに、小破片が出土していて、それらのなかには体部外面に平行タタキの施されたものや、刷毛目の施されたものがある。遺物の所属時期は8世紀代である。

#### 土坑16 (SK16) [第3図]

調査区中央部のほぼ中央で、土坑15 (SK15) に南接して検出された。

出土遺物は少なく、土師器が小破片も含めて4点出土しただけである。

土師器のうち形態がわかるものには、脚部片が1点ある。外面にヘラケズリによる面取りが施されていることから、8世紀代の高坏あるいは盤の脚部と推測できる。

#### 土坑17 (SK17) [第3図]

調査区中央部の南端で検出された。

出土遺物は少なく、土師器と製塙土器が出土している。

土師器は小破片も含めて4点で、そのうちの1点は皿の口縁部と思われる。製塙土器も小破片を含めて3点ということしかわからない。皿の口縁部の形状からみて、所属時期はおそらく8世紀代であろう。

#### 土坑18 (SK18) [第3図]

調査区のほぼ中央で検出された。

遺物は出土していない。

#### 土坑19 (SK19) [第3図]

調査区中央部西寄りの北側で検出された。

遺物は出土していない。

#### 土坑20 (SK20) [第3図]

調査区中央部西寄りの南端で検出された。

出土遺物は少なく、土師器と製塙土器が出土している。

土師器は小破片が1点あるだけで、形態も不明である。製塙土器は小破片も含めて3点あるが、1点は口縁部片で、口縁端部が内側に丸く膨らむ形状を呈している。所属時期は8世紀代であろう。

#### 土坑21 (SK21) [第3図]

調査区西部中央寄りの中央で検出された。

遺物は出土していない。

#### 土坑22 (SK22) [第3図]

調査区西部中央寄りの南側で検出された。

遺物は出土していない。

#### 土坑23 (SK23) [第3図]

調査区西部中央寄りの南端で検出された。

遺物は出土していない。

#### **土坑24 (SK24) [第3図]**

調査区西部、南側で検出された。

出土遺物は少なく、土師器の小破片が2点出土しているだけである。

#### **土坑25 (SK25) [第3図]**

調査区西部、北西側で検出された。

出土遺物は少なく、土師器の把手片1点と小破片が7点、須恵器の小破片が3点出土しているだけである。土師器の把手は断面が扁平な舌状の把手で、8世紀代のものである。

#### **土坑26 (SK26) [第3図]**

調査区西部中央北寄りで検出された。北側は土坑25 (SK25) によって潰されている。

#### **土坑27 (SK27) [第3図・第5図 (32~39), 図版5 (上), 図版6・7]**

調査区西端部中央で検出された。

埋土から須恵器と土師器、焼土塊が出土している。

須恵器は壺蓋、高坏、短頸壺、甕が出土している。壺蓋は2種ある。一つは(32・33)のような天井部と口縁部を分ける稜線や凹線がまったく認められない形態で、天井部はヘラ切り未調整のもので、あと一つは(34)のような、天井部に小さな宝珠状のつまみが付き、口縁部にかえりをもつ形態のものである。量的には前者が多い。無蓋高坏は1点(36)で、坏部とわずかに脚基部が残っているだけである。短頸壺(35)は短く外寄する口縁部をもち、下膨れの体部をもつ。底部外面にヘラ記号が認められる。甕は口縁部の破片が1点出土している。土師器は坏、高坏、甕が出土している。坏(37・38)は正放射状の暗文が施されているものと、施されていないものがある。甕は3点確認できているが、すべて(39)と類似する。須恵器、土師器とも7世紀代に所属する。

#### **土坑28 (SK28) [第3図]**

調査区西部西端、北寄りで検出された。

遺物は出土していない。

#### **土坑29 (SK29) [第3図]**

調査区西部南端で検出された。

遺物は出土していない。

#### **掘立柱建物1 (SB1 ; p1~15) [第3図・第6図 (40)]**

調査区の南東隅近くで検出された。現状では東西方向に梁間2間×桁行4間で、北側には廂の付く建物である。南列の柱掘りかたは北側約3分の1だけを検出し、南側約3分の2は調査区の外になる。柱掘りかたの形状はほぼ四角形である。

掘立柱建物はp1からp15で構成されているが、そのうちのp2, p6, p9, p15に柱穴が確認された。

遺物は柱掘りかたp1, 柱掘りかたp2, 柱穴p2, 柱掘りかたp3, 柱掘りかたp5, 柱掘りかたp6, 柱掘りかたp8, 柱穴p9, 柱掘りかたp13から須恵器と土師器が出土した。

柱掘りかたp1から出土した須恵器は、小破片2点だけで器種は不明である。土師器は坏と甕、把手片が出土している。坏の中には正放射状の暗文が施されたものも認められる。把手片は1点で舌状の形態をもつ。

柱掘りかたp2から出土した須恵器は、小破片2点だけで器種は不明である。土師器は坏と甕が出土している。坏の中には正放射状の暗文が施されたものも認められる。柱穴p2から出土した須恵器は、小破片1点だけで器種は不明である。土師器は坏、皿、甕、高台片が認められる。坏には暗文が認められないが、皿には正放射状の暗文が施されている。

柱掘りかたp3から出土した須恵器には、口縁部に内傾する立ち上がりのある坏身が1点、そのほか小破片が9点認められる。土師器には内面に暗文が施されていない坏や甕のほか、小破片が25点認められる。

柱掘りかたp5から出土した須恵器は3点、土師器は11点であるが、すべて小破片である。

柱掘りかたp6から出土した須恵器には、蓋坏や甕の破片がある。土師器は坏、皿、甕が出土

した。坏に暗文が施されたものはない。

柱穴p6からは遺物は出土していない。

柱穴p8からは須恵器坏身（40）が出土している。

柱穴p9から出土した須恵器は坏蓋で、天井部に扁平なつまみの付く形態のものであるが、つまみは欠失している。土師器は坏と甕で、坏は正放射状の暗文が施されている。

柱掘りかたp13から出土した須恵器は1点、土師器は2点があるが、すべて小破片である。

#### 掘立柱建物2 (SB2 ; p16~22) [第3図]

調査区の中央部南側で検出された。現状では南北方向に梁間2間×桁行2間以上で検出された。建物の南辺は調査区の外になる。柱掘りかたの形状は円形か楕円形である。

掘立柱建物2はp16からp22で構成されているが、そのうちのp21, p22に柱穴を確認した。構成する柱掘りかた、柱穴からは遺物は出土していない。

#### 掘立柱建物3 (SB3 ; p23~28) [第3図・第6図 (41)]

調査区の中央部北側で、東西方向に梁間2間×桁行2間で検出された。柱掘りかたの北側隅は調査区の外になる。柱掘りかたの形状には四角形、円形か楕円形、あるいは不整形と多様である。

掘立柱建物3はp23からp28で構成されているが、柱穴は確認されていない。

遺物は、柱掘りかたp25, p27, p28から出土している。

柱掘りかたp25からは土師器の坏と甕の小破片が出土している。

柱掘りかたp27からは須恵器と土師器が出土している。いずれも小破片で形態の分かるものはない。

柱掘りかたp28からは土師器と瓦が出土している。土師器には坏と甕がある。坏は2点あるがともに正放射状の暗文が施されている。ほかに小破片が31点認められるが、その中の2点に暗文が認められる。瓦は玉縁式丸瓦（41）である。

#### 掘立柱建物4 (SB4 ; p29~33) [第3図]

調査区の北側で検出された。現状では南北方向に梁間3間×桁行2間以上で検出された。ただし南列の柱掘りかたの一つは、土坑12（SK12）で潰されている。建物は北側調査区外に延びる。柱掘りかたの形状には四角形、隅丸方形、三角形と多様である。

掘立柱建物4はp29からp33で構成されているが、そのうちのp29とp32に柱穴が確認された。

遺物は、柱掘りかたp30~33と柱穴p29, p32から出土している。

柱穴p29からは須恵器と土師器、製塙土器が出土した。須恵器は坏蓋が1点あるが、天井部と口縁部を分ける

稜線や凹線がまったく認められない形態で、天井部はへら切り未調整である。そのほかに小破片が5点ある。

土師器は坏、皿、甕などが出土したがいすれも小破片である。製塙土器は1点で、筒状の体部からわずかに外傾しながら口縁部に至り、口縁端部で内側に肥厚する形態をもつ。

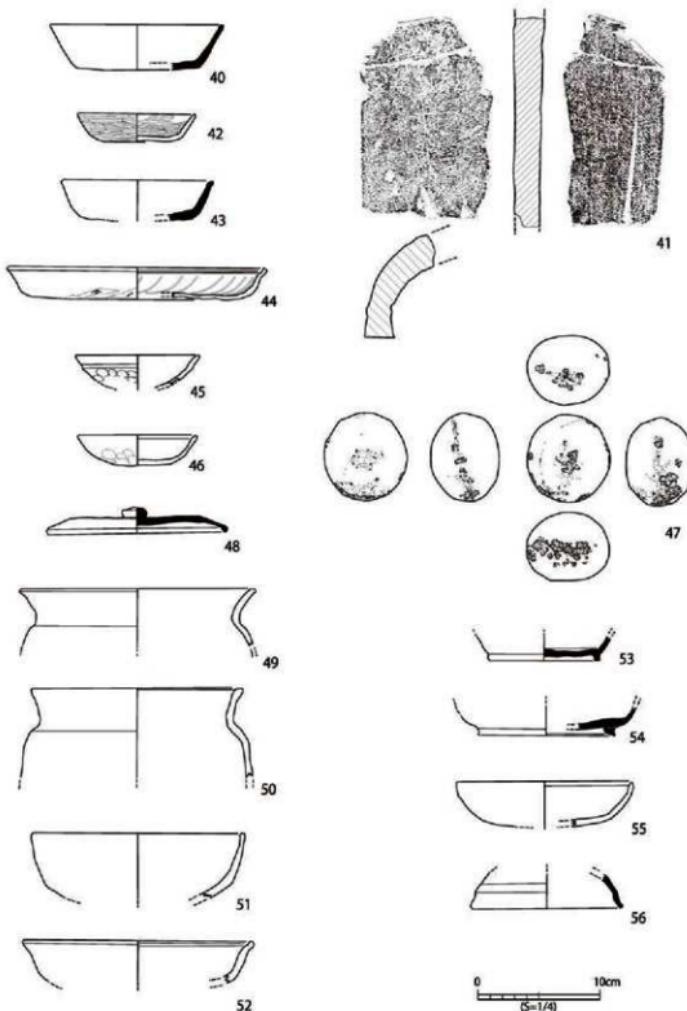
柱掘りかたp30からは須恵器、土師器、瓦器、瓦が出土している。須恵器は坏身、鉢などが出士している。坏身は平底、あるいは高台の付く形態のものである。土師器は坏、皿、甕などが出土している。瓦器は碗が1点出土しているが高台部が欠失している。瓦は平瓦で、凸面に縄目タキが認められる。

柱掘りかたp31からは須恵器、土師器、瓦が出土している。須恵器は小破片が1点出土しているが器種は分からず。土師器は皿、甕などが出土している。小破片も含めて暗文は認められない。瓦は平瓦1点、丸瓦1点のほかに、瓦としか分らない破片が2点出土した。

柱掘りかたp32からは須恵器と土師器が出土している。須恵器は坏蓋1点、坏身1点のほかに小破片が1点出土している。坏蓋は天井部と口縁部を分ける稜線や凹線がまったく認められない形態である。坏身は口縁部に内傾する立ち上がりがある形態のものである。土師器は皿、甕、把手片が出土している。皿には暗文が認められないが、そのほかに出土している小破片24点には、暗文の認められるものが2点ある。把手片は舌状の形態をもつものである。

柱穴p32からは須恵器、土師器、サヌカイトが出土している。須恵器は坏蓋が1点あり、天井部と口縁部を分ける稜線や凹線がまったく認められない形態で、天井部がへラ切り未調整である。土師器は4点あるが、すべて小破片で形態は分からない。サヌカイトは1点出土している。

柱掘りかたp33からは須恵器と土師器が出土している。須恵器には坏身がある。口縁部に立ち上がりの認められない形態のものである。土師器は皿と壺がある。皿は体部内面に正放射状の暗文と、内底面に螺旋状の暗文が施されているものがある。



第6図 掘立柱建物1・3、ピット出土遺物

**掘立柱建物 5 (SB 5 ; p34~38) [第3図]**

調査区の北東部で、現状では南北方向に梁間3間×桁行2間以上で検出された。建物は北側調査区外に延びる。柱掘りかたの形状には隅丸方形、梢円形、ほぼ円形が認められる。掘立柱建物5は柱掘りかたp34~38で構成されているが、そのうちのp34とp38に柱穴が確認された。

柱掘りかたからは遺物は出土していないが、柱穴p38から須恵器と土師器が出土している。

柱穴p38から出土した須恵器と土師器はすべて小破片で、形態の分かることはない。

**ピット [第3図・第6図(42~56), 図版7]**

総数374基検出しているが、第2図および表1では遺物の出土した128基にのみ、遺構番号を付した。このうち遺物を図化したのはSP39, SP52, SP65, SP76, SP79, SP96, SP97, SP100, SP102, SP123から出土したものだけである。

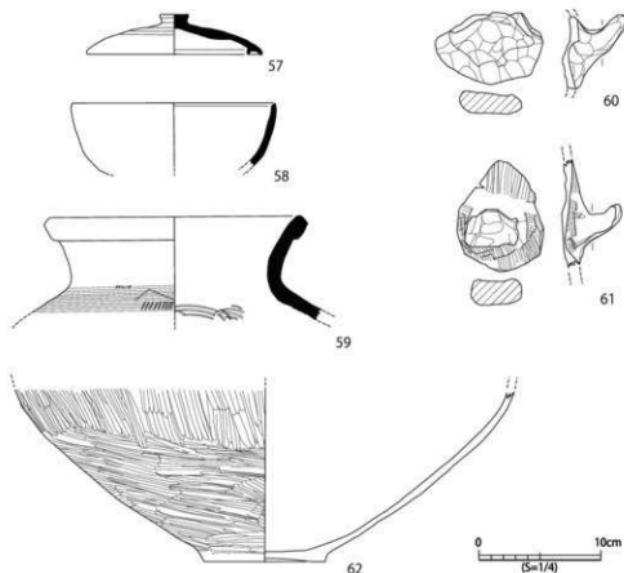
ピットの検出密度は東側の方が高いこと、さらに出土遺物の所属時期が7世紀~8世紀代のものが圧倒的に多く、わずかに9世紀代、そして中世に入るものも若干認められるだけで、やはり古代の遺構が調査区の東側を中心に広がっていたことが示唆される。

**落ち込み (SX 1・2) [第3図・第7図(57~62), 図版5下・図版7]**

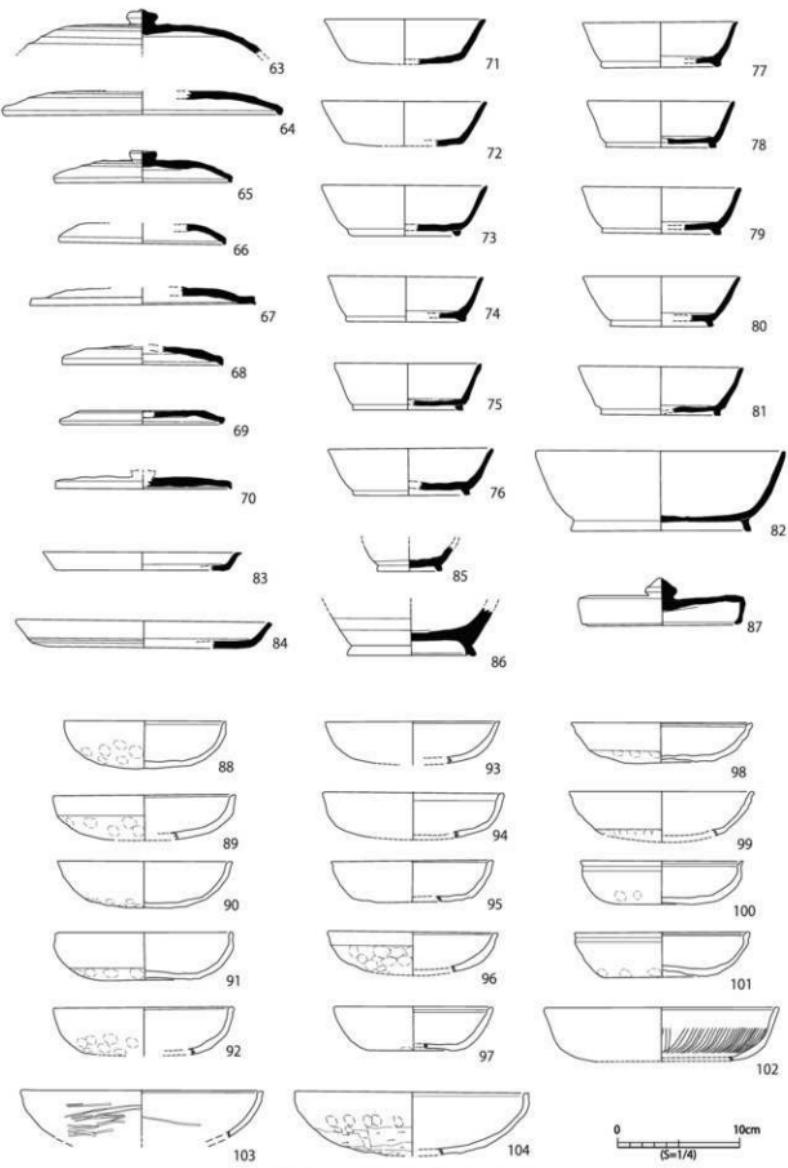
調査区の北部から北東部にかけての縁部で検出された。単なる地形の傾斜面の可能性もあり、包含層として認識すべきであったかも知れないが、比較的の遺物がまとまって出土していることから落ち込みとして便宜的に識別しておく。

落ち込み1 (SX 1) の埋土からは弥生土器、須恵器、土師器、サヌカイトが出土している。

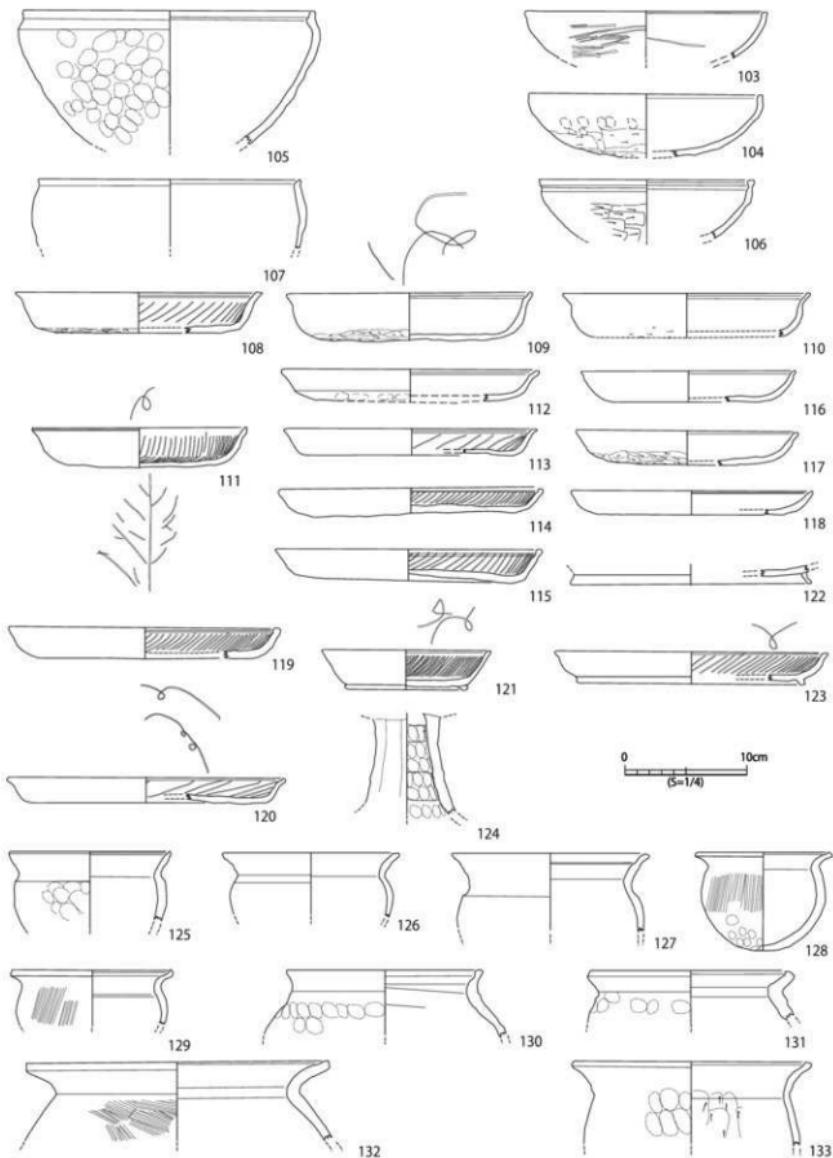
弥生土器には壺の底部片(62)1点と、ほかに小破片が2点ある。壺の底部片は生駒西麓産の胎土をもつ、きわめて器壁の薄いもので、底部から体部への張り出し具合から下彫れのものであ



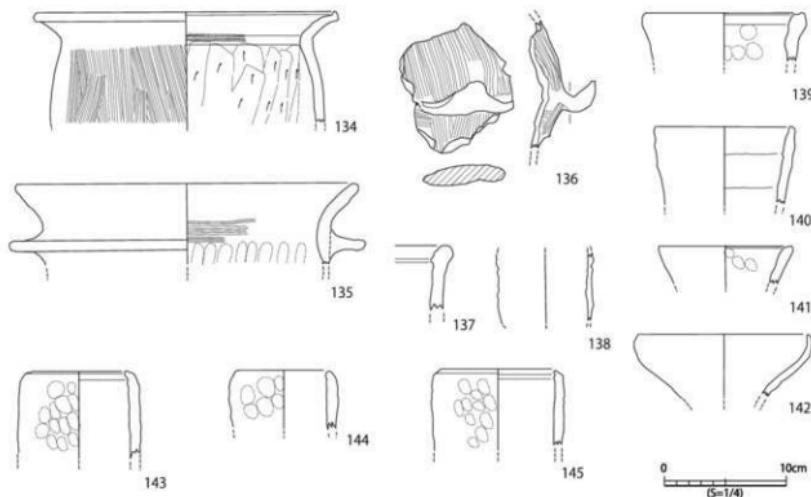
第7図 落ち込み1・2出土遺物



第8図 包含層出土遺物（その1）



第9図 包含層出土遺物（その2）



第10図 包含層出土遺物（その3）

ることは推測できる。その形態から所属時期は弥生時代中期後半、畿内第Ⅲ様式期新段階から第Ⅳ様式期に比定できる。須恵器は壺蓋1点、壺身3点、提瓶の体部片1点のほかに、小破片が5点ある。土師器は壺、皿、鉢、高壺脚部、壺、甕が出土している。サヌカイトは1点出土している。須恵器、土師器の所属時期はともに8世紀代に比定できる。

落ち込み2 (SX2) の埋土からは、須恵器、土師器、瓦器、製塙土器、サヌカイト、馬齒(図版5下)が出土している。

須恵器には壺蓋(57)、壺身、高壺脚部、鉢(58)、甕(59)がある。土師器には壺、皿、高台付き皿、高壺脚柱部・裾部、甕、あるいは鏃の把手(60・61)、鎧釜などがある。瓦器は1点あるが、器種は不明である。製塙土器は2点あり、ともにほぼ直立する口縁部をもつ。サヌカイトは2点出土している。土師器と須恵器は7世紀から8世紀代に比定できる。

#### 包含層〔第3図・第8~10図、図版7・図版8〕

土層断面図で調査区の東半部に堆積する「9. 暗灰褐色土」とした層から、多量の遺物が出土している。出土遺物総量の約3分の1は、この包含層から取り上げられている。

出土遺物には須恵器、土師器、黒色土器、瓦器、製塙土器、瓦、鉄片、サヌカイト、焼土塊などがある。

須恵器には壺蓋(63~70)、壺身(71~82)、皿(83・84)、鉢、壺(85・86)、壺蓋(87)、甕などがある。土師器には壺(88~104)、皿(108~123)、鉢(105~107)、高壺(124)、甕(125~129・131~134)、壺(130)、鎧釜(135)、把手片(136)がある。須恵器も土師器も所属時期は7世紀から8世紀代に比定できる。黒色土器は小破片が1点だけ出土している。瓦器も小破片が出土しているだけである。製塙土器(137~145)は、形態にバリエーションが認められる。また、(143~145)の内面には布目痕が観察できる。瓦は平瓦と丸瓦が出土している。鉄片は1点だけで形態は分からず。サヌカイトは1点出土しているだけである。その他、焼土塊2片が出土している。

(田川・栗田)

## 第5章　まとめ

今回の調査では、これまであまり知られていなかった甲田南遺跡の奈良時代の集落の一端を窺える遺構が数多くみつかった。検出された遺構は、溝1条、土坑29基、掘立柱建物5棟、ピット374基、落ち込み2か所である。

これらのうち、幾つかの遺構間で新旧の分かる切り合い関係が認められたが、明確な時期差を示す遺物の出土は認められなかった。遺構の大半は7～8世紀という限られた時期に比定することができるが、圧倒的に8世紀代のもので占められる。また、明らかに9世紀以降に下るものは掘立柱建物4（SB4）の柱掘りかたを一部潰していた土坑12（SK12）とピット39（SP39）などごく一部しか認められなかった（註1）。

これらのことから、今回の調査区で発見された集落は、ほぼ奈良時代という限られた時期にのみ機能していた集落であったことが示唆されるのである。

今回の調査区から北東方向にある国道309号を中心に大きく広がる弥生時代中期の遺構は、今回の調査区内ではまったく確認できず、かろうじて数点のサヌカイトと弥生土器の壺底部片がみつかったにすぎない。また、同じく北側で検出された9世紀代に比定される4基の古墓と同時期の遺物も少なく、今回の調査区にあった集落は、古墓よりも少し前の時代の集落だったと言えよう。

これら2つの時期の狭間に機能していた奈良時代の様子を、もう少し詳しくみていくことにしよう。

甲田南遺跡の奈良時代の集落の核をなす遺構は、5棟の掘立柱建物である。残念ながらそれ以外の遺構は、機能がよく分からぬ。遺構や遺物の分布の中心は調査区の東側にある。なお、掘立柱建物群は調査区外の南北方向へとさらに広がっている。掘立柱建物1（SB1）と掘立柱建物3（SB3）が東西方向、ほかの3棟は南北方向と、建物の方向は直交する関係にあるものの、すでに述べた通りこれらの中に明確な時期差は追えず、機能の異なる何らかの建物が併存していたと考えるしかない。それは、これらの建物が重複したことからも裏付けられる。さらに言えば、これらの建物群の中心となるものは、庭付きの最も大きな掘立柱建物1（SB1）で、この集落の中心的な存在であったことが想定できよう。

遺物の観点から集落を考えると、土器類でも壺、皿類の多さに加えて、製塙土器と馬齒の存在に特徴がある。とりわけ製塙土器は土坑13（SK13）、土坑15（SK15）、土坑17（SK17）、土坑20（SK20）、掘立柱建物4（SB4）の柱穴29（p29）、ピット116（SP116）、落ち込み2（SX2）のほか、包含層からも出土していて、一般的な集落にしては出土量が多い。また、馬齒は落ち込み2（SX2）とした地形の傾斜地から出土しているが、同じ場所から製塙土器も出土している。これら両者の存在を合わせ考えると、単なる農村的な集落を想定するよりも、もっと特殊な機能を有する、例えば駅家などの想定も必要になるかもしれない。

今後の周辺域の調査の蓄積によって、集落の機能が明らかになることを期待する。（栗田）

註1. 嚴密な遺構の年代を決定するには出土遺物の残存状況から難しい事実もあるが、明らかに奈良時代以降の遺物である瓦器や瓦などの出土量は少ない。それに比して、奈良時代の遺物の多さは注目に値する。それゆえ後世の遺構の擾乱を受けている掘立柱建物4（SB4）の柱掘りかた（p30）から出土した瓦器や瓦をもって、建物の時期を下せることはしていない。

### 【参考文献】

- 今村道雄（1982）『富田林市南甲田、若葉町他所在 甲田南遺跡発掘調査概要報告書－一般国道309号線建設に伴う弥生時代中期集落跡の調査－』、（大阪府教育委員会刊行）、大阪。
- 尾上 実（1981）『甲田南遺跡発掘調査概要・I』、（大阪府教育委員会刊行）、大阪。
- 北野耕平（1985）「第六章 第四節 一 火葬墓制の成立 和銅錢を副葬した墳墓」、富田林市史編集委員会（編）『富田林市史』第1巻所収、富田林（大阪）、568-570頁。
- 小林義孝・河内一浩（1984）『甲田南遺跡現地説明会資料』。
- 小林義孝（1985）『甲田南遺跡発掘調査概要・V 一般国道309号線建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査』（大阪府教育委員会刊行）、大阪。

表2 遺構規模および出土遺物一覧表（その1）

層・遺構名	形状	規模 (m) 長さ×幅×奥行き、あるいは 直径×深さ。（—）は実測した範囲	出土遺物	出土遺物の所属時期	備考
層1 [SB1] (LN11-1)	—	(4.75) × 0.75 × 0.35	陶生土器、須恵器	7世紀初頭～8世紀代	西側で二段に分かれる
土坑1 [SK1] (LN20)	不整形	1.95 × 1.25 × 0.47	土師器	8世紀代	—
土坑2 [SK2] (LN130)	不整形	2.6 × 1.9 × 0.15	須恵器、土師器、瓦片	8世紀代～	—
土坑3 [SK3] (LN132)	不整形	(1.78) × (1.85) × 0.43	須恵器、土師器	8世紀代	—
土坑4 [SK4] (LN131)	ほぼ円形	1.75 × 1.0 × 0.51	須恵器、土師器	8世紀代	—
土坑5 [SK5] (LN32)	不整形	0.8 × 0.65 × 0.08	土師器	—	—
土坑6 [SK6] (LN486)	四角形	1.5 × 1.05 × 0.06	なし	—	—
土坑7 [SK7] (LN33)	不整形	1.88 × 1.6 × 0.11	須恵器、土師器、黒色土器	8世紀～	—
土坑8 [SK8] (LN153)	不整形	2.5 × 1.35 × 0.18	土師器、瓦	—	—
土坑9 [SK9] (LN129)	ほぼ四角形	1.32 × 1.28 × 0.52	須恵器、土師器	7世紀末～8世紀代	—
土坑10 [SK10] (LN106)	不整形	4.6 × 2.3 × 0.14	須恵器、土師器	8世紀代	—
土坑11 [SK11] (LN478)	ほぼ楕円形	2.35 × 1.16 × 0.6	なし	—	—
土坑12 [SK12] (LN64)	不整形	1.8 × 1.25 × 0.33	須恵器、土師器、瓦器、瓦片	8世紀～中世	掘立柱建物4の柱穴を指している。
土坑13 [SK13] (LN78)	不整形	3.5 × 1.5 × 0.25	須恵器、土師器、製塙土器、瓦	8世紀代	—
土坑14 [SK14] (LN90)	(不整形)	7.5 × 4.8 × 0.13	須恵器、土師器	7世紀～8世紀代	—
土坑15 [SK15] (LN167)	不整形	1.9 × 0.8 × 0.09	土師器、製塙土器	8世紀代	—
土坑16 [SK16] (LN166)	不整形	2.3 × 1.4 × 0.25	土師器	8世紀代	—
土坑17 [SK17] (LN195)	(不整形)	6.9 × (5.13) × 0.01	土師器、製塙土器	8世紀代	—
土坑18 [SK18] (LN231)	不整形	2.03 × 1.3 × 0.07	なし	—	—
土坑19 [SK19] (LN248)	ほぼ四角形	2.21 × 1.08 × 0.11	なし	—	—
土坑20 [SK20] (LN286)	(不整形)	(3.8) × 3.01 × 0.11	土師器、製塙土器	8世紀代	—
土坑21 [SK21] (LN322)	不整形	2.95 × 2.83 × 0.05	なし	—	—
土坑22 [SK22] (LN314)	不整形	3.16 × 1.72 × 0.01	なし	—	—
土坑23 [SK23] (LN419)	(不整形)	(5.25) × (3.45) × 0.05	なし	—	—
土坑24 [SK24] (LN434)	不整形	1.79 × 2.97 × 0.1	土師器	—	—
土坑25 [SK25] (LN470)	(半円形)	(1.2) × (1.0) × 0.22	須恵器、土師器	8世紀代	—
土坑26 [SK26] (LN468)	不整形	2.3 × 1.4 × 0.34	なし	—	—
土坑27 [SK27] (LN456)	不整形	(4.75) × 3.5 × 0.2	須恵器、土師器、焼土塊	7世紀代	—
土坑28 [SK28] (LN469)	(不整形)	(0.7) × (3.5) × 0.08	なし	—	—
土坑29 [SK29] (LN441)	(不整形)	(3.15) × (0.88) × 0.14	なし	—	—
掘立柱建物1 [SB1-p1] (LN399)	ほぼ長方形	1.1 × 0.7 × 0.32	須恵器、土師器	8世紀代	—
掘立柱建物1 [SB1-p2] (LN393)	四角形	1.05 × 0.95 × 0.17	須恵器、土師器	8世紀代	—
掘立柱建物1 [SB1-p3] (LN392)	円形	0.35 × 0.33 × 0.09	須恵器、土師器	8世紀代	—
掘立柱建物1 [SB1-p4] (LN390-1)	四角形	0.9 × 0.85 × 0.22	須恵器、土師器	7世紀中頃～8世紀代	—
掘立柱建物1 [SB1-p4] (LN487)	(四角形)	1.0 × (0.2) × 0.09	なし	—	—
掘立柱建物1 [SB1-p5] (LN101)	四角形	0.8 × 0.77 × 0.15	須恵器、土師器	—	—
掘立柱建物1 [SB1-p6] (LN108)	楕円形	1.4 × 1.1 × 0.57	須恵器、土師器	8世紀代	—

表2 遺構規模および出土遺物一覧表（その2）

層・遺構名	形状	規模 (m) 高さ×幅×深さ、あるいは 直角×底辺× ) は実測した値	出土遺物	出土遺物の所属時期	備考
離立柱建物 1 [SB1-p07+柱穴] (LN109)		0.25 × 0.2 × 0.02	なし	—	—
離立柱建物 1 [SB1-p07] (LN116)	(四角形)	1.0 × (0.2)	なし	—	—
離立柱建物 1 [SB1-p08] (LN103)	ほぼ長方形	1.0 × 0.42 × 0.33	須恵器、土師器	8世紀代	—
離立柱建物 1 [SB1-p09+柱穴] (LN100-2)	ほぼ円形	0.38 × 0.35 × 0.12	須恵器、土師器	8世紀代	柱の脚りかたは土坑 10 に 積まれている
離立柱建物 1 [SB1-p10] (LN481)	(四角形)	(0.6) × (0.1) × 0.04	なし	—	—
離立柱建物 1 [SB1-p11] (LN461 重複)	楕円形	—	なし	—	—
離立柱建物 1 [SB1-p12] (LN492)	(四角形)	—	なし	—	—
離立柱建物 1 [SB1-p13] (LN154)	円形	0.3 × 0.2 × 0.07	須恵器、土師器	—	—
離立柱建物 1 [SB1-p14] (LN485)	(四角形)	0.13 × 0.7 × ?	なし	—	—
離立柱建物 1 [SB1-p15] (LN105)	(四角形)	(0.8) × 0.35 × 0.1	なし	—	—
離立柱建物 1 [SB1-p15+柱穴] (LN110)	ほぼ円形	0.18 × 0.15 × 0.05	なし	—	—
離立柱建物 2 [SB2-p16] (LN308)	楕円形	0.7 × 0.48 × 0.05	なし	—	—
離立柱建物 2 [SB2-p17] (LN297)	ほぼ円形	0.23 × 0.18 × 0.05	なし	—	—
離立柱建物 2 [SB2-p18] (LN296)	(楕円形)	0.5 × (0.4) × 0.1	なし	—	—
離立柱建物 2 [SB2-p19] (LN274)	ほぼ円形	0.4 × 0.51 × 0.11	なし	—	—
離立柱建物 2 [SB2-p20] (LN272)	円形	0.23 × 0.22 × 0.04	なし	—	—
離立柱建物 2 [SB2-p21] (LN278)	不整形	0.72 × 0.68 × 0.13	なし	—	—
離立柱建物 2 [SB2-p21+柱穴] (LN279)	円形	0.21 × 0.2 × 0.01	なし	—	—
離立柱建物 2 [SB2-p22] (LN287)	円形	0.58 × 0.53 × 0.03	なし	—	—
離立柱建物 2 [SB2-p22+柱穴] (LN288)	円形	0.22 × 0.02	なし	—	—
離立柱建物 3 [SB3-p23] (LN246-1)	楕円形	1.25 × 0.65 × 0.17	なし	—	—
離立柱建物 3 [SB3-p24] (LN253)	ほぼ円形	0.49 × 0.47 × 0.12	なし	—	—
離立柱建物 3 [SB3-p25] (LN256)	ほぼ四角形	0.6 × 0.7 × 0.16	土師器	—	—
離立柱建物 3 [SB3-p26] (LN246)	円形	0.46 × 0.38 × 0.12	なし	—	—
離立柱建物 3 [SB3-p27] (LN233)	不整形	1.02 × 1.0 × 0.2	須恵器、土師器	8世紀代	—
離立柱建物 3 [SB3-p28] (LN75)	ほぼ四角形	0.58 × 0.5 × 0.18	土師器、瓦	8世紀代	—
離立柱建物 4 [SB4-p29] (LN69)	隅丸三角形	0.98 × 0.9 × 0.37	なし	—	—
離立柱建物 4 [SB4-p29+柱穴] (LN69-1)	ほぼ円形	0.45 × 0.38 × 0.06	須恵器、土師器、製塼土器	7世紀～8世紀代	—
離立柱建物 4 [SB4-p30] (LN72)	四角形	0.85 × 0.7 × 0.22	須恵器、土師器、瓦器、瓦	8世紀代～中世	—
離立柱建物 4 [SB4-p31] (LN66)	方形	1.0 × 0.92 × 0.03	須恵器、土師器、瓦	8世紀代～	—
離立柱建物 4 [SB4-p32] (LN63)	隅丸方形	0.93 × 0.8 × 0.1	須恵器、土師器	7世紀～8世紀代	—
離立柱建物 4 [SB4-p32+柱穴] (LN63-2)	円形	0.17 × 0.05	須恵器、土師器、サメカイト	弥生時代、7世紀代	—
離立柱建物 4 [SB4-p33] (LN61)	隅丸方形	1.2 × 1.0 × 0.41	須恵器、土師器	8世紀代	—
離立柱建物 5 [SB5-p34] (LN61)	隅丸方形	0.8 × 0.7 × 0.03	なし	—	—
離立柱建物 5 [SB5-p34+柱穴] (LN62)	ほぼ円形	0.25 × 0.2 × 0.07	なし	—	—
離立柱建物 5 [SB5-p35] (LN64)	楕円形	0.65 × 0.48 × 0.25	なし	—	—
離立柱建物 5 [SB5-p36] (LN14)	楕円形	0.5 × 0.4 × 0.15	なし	—	—

表2 遺構規模および出土遺物一覧表（その3）

層・遺構名	形状	規模 (m) 長さ×幅×厚さ、あるいは 直径×深さ。〔〕は実測した範囲	出土遺物	出土遺物の所属時期	備考
掘立柱建物 5 [SB0-p37] (LN15)	椎円形	0.9 × 0.8 × 0.39	なし	—	—
掘立柱建物 5 [SB0-p38] (LN11-6)	ほぼ円形	0.4 × 0.35 × 0.14	なし	—	—
掘立柱建物 5 [SB0-p38+柱穴] (LN11-5)	ほぼ円形	0.4 × 0.35 × 0.14	須恵器、土師器	—	—
ピット 39 [SP49] (LN11-4)	楕丸方形	0.65 × 0.6	須恵器、墨色土器	8～9世紀代	—
ピット 40 [SP40] (LN17)	不整形	0.5 × 0.35 × 0.04	土師器	—	—
ピット 41 [SP41] (LN16)	円形	0.15 × 0.05	土師器	—	—
ピット 42 [SP42] (LN18)	ほぼ円形	0.3 × 0.25 × 0.08	土師器	8世紀代	—
ピット 43 [SP43] (LN141-2)	ほぼ円形	0.28 × 0.25 × 0.02	須恵器、土師器	8世紀代	—
ピット 44 [SP44] (LN141-4)	ほぼ円形	0.3 × 0.22 × 0.01	土師器	8世紀代	—
ピット 45 [SP45] (LN141-3) (半円形)	0.75 × 0.48 × 0.19	土師器	—	—	—
ピット 46 [SP46] (LN137)	椎円形	0.85 × 0.23 × 0.06	須恵器	7世紀代	—
ピット 47 [SP47] (LN130-1) (不整形)	(1.3) × 1.3 × 0.22	須恵器、土師器	8世紀代	—	—
ピット 48 [SP48] (LN138) (四角形)	0.4 × 0.35 × 0.05	須恵器、土師器	8世紀代	—	—
ピット 49 [SP49] (LN133)	ほぼ円形	0.6 × 0.5 × 0.03	須恵器、土師器	—	—
ピット 50 [SP50] (LN130-6)	ほぼ円形	0.45 × 0.4 × 0.15	須恵器、土師器	8世紀代	—
ピット 51 [SP51] (LN25)	不整形	0.7 × 0.4 × 0.1	須恵器、土師器	7世紀代	—
ピット 52 [SP52] (LN28)	円形	0.2 × 0.05	須恵器、土師器	8世紀代	—
ピット 53 [SP53] (LN36)	椎円形	1.2 × 0.73 × 0.16	土師器	8世紀代	—
ピット 54 [SP54] (LN149)	ほぼ円形	1.35 × 1.05 × 0.48	須恵器、土師器	8世紀代	—
ピット 55 [SP55] (LN146)	ほぼ円形	0.45 × 0.35 × 0.1	須恵器	—	—
ピット 56 [SP56] (LN144)	不整形	1.3 × 0.4 × 0.2	須恵器、土師器	7世紀～8世紀代	—
ピット 57 [SP57] (LN151)	円形	0.6 × 0.39	須恵器、土師器	8世紀代	—
ピット 58 [SP58] (LN148)	ほぼ円形	0.38 × 0.32 × 0.11	土師器	8世紀代	—
ピット 59 [SP59] (LN130-6) (四角形)	1.0 × 0.9 × 0.25	須恵器、土師器、鉢片	7世紀代	—	—
ピット 60 [SP60] (LN131-1) (不整形)	0.8 × 0.7 × 0.17	須恵器、土師器、鉢片	8世紀代	—	—
ピット 61 [SP61] (LN134)	楕丸方形	1.0 × 0.85 × 0.43	須恵器、土師器	8世紀代	—
ピット 62 [SP62] (LN136)	不整形	0.7 × 0.45 × 0.2	須恵器、土師器	—	—
ピット 63 [SP63] (LN135)	不整形	1.18 × 0.9 × 0.1	須恵器、土師器、鉢片	—	—
ピット 64 [SP64] (LN11-7)	ほぼ円形	0.4 × 0.35 × 0.13	須恵器、土師器	8世紀代	—
ピット 65 [SP65] (LN31)	ほぼ円形	0.45 × 0.35 × 0.1	須恵器、土師器	7世紀～8世紀代	—
ピット 66 [SP66] (LN35)	椎円形	0.25 × 0.17 × 0.01	土師器	—	—
ピット 67 [SP67] (LN37)	不整形	1.0 × 0.7 × 0.22	須恵器、土師器	8世紀代	—
ピット 68 [SP68] (LN160)	楕丸方形	0.7 × 0.59 × 0.38	須恵器、土師器	—	—
ピット 69 [SP69] (LN161)	ほぼ円形	0.6 × 0.5 × 0.17	須恵器、土師器	8世紀代	—
ピット 70 [SP70] (LN38)	ほぼ円形	0.2 × 0.15 × 0.03	須恵器、土師器	—	—
ピット 71 [SP71] (LN12)	ほぼ台形	1.5 × 0.85 × 0.09	須恵器、土師器	7世紀～8世紀代	—
ピット 72 [SP72] (LN36)	椎円形	0.65 × 0.6 × 0.06	須恵器、土師器、サメカイト	弥生時代、8世紀代	—
ピット 73 [SP73] (LN36-1)	椎円形	0.33 × 0.23 × 0.08	須恵器、土師器	8世紀代	—

表2 遺構規模および出土遺物一覧表（その4）

層・遺構名	形状	規模 (m) 長さ×幅×深さ、あるいは範囲 直径×高さ、( ) は完壁した範囲	出土遺物	出土遺物の所属時期	備考
ピット74 [SP74] (LN163)	ほぼ円形	0.3 × 0.2 × 0.05	土師器	8世紀代	—
ピット75 [SP75] (LN162)	隅丸方形	0.58 × 0.5 × 0.04	須恵器	8世紀代	—
ピット76 [SP76] (LN120)	ほぼ円形	0.4 × 0.3 × 0.09	須恵器、土師器	—	—
ピット77 [SP77] (LN107)	不整形	0.95 × (0.7) × 0.22	須恵器、土師器	8世紀代	—
ピット78 [SP78] (LN473)	ほぼ円形	0.28 × 0.27 × 0.08	土師器	—	—
ピット79 [SP79] (LN122)	ほぼ円形	0.48 × 0.3 × 0.05	須恵器、土師器、黑色土器、叩き石	8世紀～	—
ピット80 [SP80] (LN121)	ほぼ円形	0.35 × 0.28 × 0.04	土師器	—	—
ピット81 [SP81] (LN441)	ほぼ円形	0.48 × 0.4 × 0.11	須恵器、土師器、サスカイト、鉄片	弥生時代、7世紀～8世紀代	—
ピット82 [SP82] (LN440)	ほぼ椭円形	1.5 × 0.62 × 0.19	須恵器、土師器	8世紀代	—
ピット83 [SP83] (LN44)	不整形	1.98 × 0.7 × 0.17	土師器	—	—
ピット84 [SP84] (LN45)	ほぼ円形	0.42 × 0.38 × 0.08	土師器	—	—
ピット85 [SP85] (LN104)	ほぼ円形	0.25 × 0.22 × 0.03	土師器	—	—
ピット86 [SP86] (LN106)	円形	0.4 × 0.22	土師器	—	—
ピット87 [SP87] (LN477)	ほぼ円形	0.23 × 0.18 × 0.01	須恵器	—	—
ピット88 [SP88] (LN478)	隅丸方形	0.6 × 0.55 × 0.01	須恵器、土師器	—	—
ピット89 [SP89] (LN100-1)	円形	0.25 × 0.08	須恵器、土師器	7世紀～8世紀代	—
ピット90 [SP90] (LN115)	ほぼ円形	0.6 × 0.55 × 0.08	須恵器、土師器	8世紀代	—
ピット91 [SP91] (LN114)	ほぼ円形	1.0 × 0.9 × 0.54	須恵器、土師器	8世紀代	—
ピット92 [SP92] (LN111)	円形	0.15 × 0.01	須恵器、土師器	8世紀代	—
ピット93 [SP93] (LN49)	円形	0.3 × 0.09	土師器	—	—
ピット94 [SP94] (LN63-1)	不整形	0.3 × 0.13 × 0.04	土師器	8世紀代	—
ピット95 [SP95] (LN62)	ほぼ円形	0.32 × 0.28 × 0.05	須恵器、土師器	8世紀代	—
ピット96 [SP96] (LN76)	楕円形	1.2 × 1.0 × 0.17	須恵器、土師器	8世紀代	—
ピット97 [SP97] (LN86)	ほぼ円形	0.65 × 0.6 × 0.36	須恵器、土師器	8世紀代	—
ピット98 [SP98] (LN85)	卵形	1.2 × 0.8 × 0.28	土師器	—	—
ピット99 [SP99] (LN98)	円形	0.2 × 0.02	土師器	8世紀代	—
ピット100 [SP100] (LN96)	隅丸三角形	0.96 × 0.75 × 0.12	須恵器、土師器、瓦	7世紀～8世紀代	—
ピット101 [SP101] (LN89)	ほぼ円形	0.8 × 0.65 × 0.19	須恵器、土師器	—	—
ピット102 [SP102] (LN91)	ほぼ椭円形	1.28 × 1.0 × 0.21	須恵器、土師器	8世紀代	—
ピット103 [SP103] (LN79)	ほぼ円形	0.65 × 0.5 × 0.17	土師器、焼土塊	—	—
ピット104 [SP104] (LN84)	楕円形	1.4 × 0.75 × 0.16	須恵器、土師器	—	—
ピット105 [SP105] (LN98)	楕円形	0.7 × 0.5 × 0.21	須恵器、土師器	8世紀代	—
ピット106 [SP106] (LN91)	ほぼ円形	0.45 × 0.4 × 0.1	須恵器	8世紀代	—
ピット107 [SP107] (LN90-2)	ほぼ円形	0.9 × 0.7 × 0.15	土師器	8世紀代	—
ピット108 [SP108] (LN69-1)	円形	0.4 × 0.18	土師器	8世紀代	—
ピット109 [SP109] (LN71)	不整形	0.85 × 0.55 × 0.14	土師器、製瓶土器	8世紀代	—
ピット110 [SP110] (LN164)	隅丸台形	0.8 × 0.6 × 0.29	須恵器、土師器	8世紀代	—
ピット111 [SP111] (LN177)	隅丸方形	0.9 × 0.84 × 0.22	須恵器、土師器	8世紀代	—

表2 遺構規模および出土遺物一覧表(その5)

層・遺構名	形状	規模 (m) 長さ×幅×深さ、あるいは 直角×深さ。( )は実測した範囲	出土遺物	出土遺物の所属時期	備考
ピット112 [SP112] (LN180)	楕丸方形	0.89 × 0.78 × 0.25	土師器	—	—
ピット113 [SP113] (LN188)	楕丸方形	0.58 × 0.7 × 0.22	須恵器、土師器	8世紀代	—
ピット114 [SP114] (LN189)	ほぼ円形	0.56 × 0.41 × 0.08	土師器	—	—
ピット115 [SP115] (LN172)	扇形	0.8 × 0.66 × 0.11	須恵器、土師器	8世紀代	—
ピット116 [SP116] (LN210)	複円形	1.22 × 0.55 × 0.11	須恵器、土師器、製塙土器	8世紀代	—
ピット117 [SP117] (LN224)	ほぼ円形	0.58 × 0.52 × 0.1	土師器	8世紀代	—
ピット118 [SP118] (LN226)	ほぼ円形	1.23 × 0.95 × 0.04	土師器	8世紀代	—
ピット119 [SP119] (LN204)	不整形	1.12 × 0.75 × 0.01	土師器	—	—
ピット120 [SP120] (LN307)	不整形	0.97 × 0.85 × 0.12	土師器	—	—
ピット121 [SP121] (LN286)	(ほぼ)円形	(0.6) × (0.65) × 0.06	須恵器、土師器	—	—
ピット122 [SP122] (LN227)	ほぼ円形	0.4 × 0.38 × 0.06	須恵器	8世紀代	—
ピット123 [SP123] (LN267)	ほぼ円形	0.65 × 0.58 × 0.27	須恵器、土師器	8世紀代	—
ピット124 [SP124] (LN318)	楕丸方形	0.35 × 0.4 × 0.11	土師器	—	—
ピット125 [SP125] (LN467)	不整形	1.1 × 1.3 × 0.16	土師器	—	—
ピット126 [SP126] (LN305)	ほぼ円形	0.51 × 0.55 × 0.02	須恵器	7世紀代	—
ピット127 [SP127] (LN379)	ほぼ円形	0.65 × 0.7 × 0.25	須恵器、土師器	—	—
ピット128 [SP128] (LN455)	ほぼ円形	0.75 × 0.85 × 0.08	土師器	—	—
落ち込み1 [SX1] (LN89, LN86, LN65, LN141)	不整形	(10.2) × (2.8) × 0.37	弥生土器、須恵器、土師器、サ メカイト	弥生時代、8世紀代	—
落ち込み2 [SX2] (LN244)	不整形	(25.4) × (13.5)	須恵器、土師器、製塙土器、瓦 器、サメカイト、高座	弥生時代、7世紀代～中世	—
事前調査トレンチ (LN391)	—	(1.45) × (1.85) × 0.1	須恵器、土師器	—	—

表3 遺物観察表(その1)

擇因 番号	図版 番号	遺構 土層	種類	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
4-1	6-1	漢1 [SD1] (LN11-1)	頭部器 耳垂	口径 11.5 器高 3.55	天井部と口縫部を分ける縫や凹縫は まったく認められない。 口縫端部は丸くおさまる。	天井部外面は削りヘア削り調査のあと、 ヘラ削り末調査。ヘラ削り時のクロロ の削り方向は左回り。 天井部内面は不定方向のナダ調査。そ のほか内外面とも削りナダ調査。 他成は良好、堅緻。	TK209型式
4-2	-	漢1 [SD1] (LN11-1)	頭部器 耳身	口径 9.8 受水槽 11.9 たちあがり高 0.5 残存器高 3.0	たちあがりは内傾して、削くたちあが る。 受部はほぼ水平にのびる。 全体に扁平化傾向にある。	器表が充電されているため調査は分かり 難いが、おそらく内外面とも削りナダ 調査で、欠失している底部には削りヘア 削り調査が施されていたと推測される。 他成は良好、堅緻。	TK209型式
4-3	-	漢1 [SD1] (LN11-1)	頭部器 耳垂脚部	断面径 11.35 残存器高 4.35	脚基部は太い。 脚部に向かって大きく開く。端部は斜 め上に延張する。脚柱部には菱方形 の透かしが3方向に穿たれている。 他成は良好、堅緻。	内外面とも回転ナダ調査。 脚元に至る(内部との接合面)は接合の ためかカキ目が施されている。 他成は良好、堅緻。	TK43～TK209型式
4-4	6-4	漢1 [SD1] (LN11-1)	土師器 坪	口径 9.6 器高 3.65	丸みをもつ底部から上方に聞く口縫部 をもつ。 口縫端部は内傾する面をもつ。	口縫部内外面ヨコナダ調査。 底部内面はナダ調査の下にわずかに指 彫刻が残る。内面はナダ調査。 内面に正放射状暗文。	飛鳥Ⅱ期
4-5	-	漢1 [SD1] (LN11-1)	土師器 坪	口径 12.6 残存器高 4.1	丸みをもつ底部から上方に聞く口縫部 をもつ。 口縫端部は内傾する面をもつ。	口縫部内外面ヨコナダ調査。 底部内面はナダ調査の下にわずかに指 彫刻が残る。内面はナダ調査。 内面に正放射状暗文。	飛鳥Ⅱ期
4-6	-	漢1 [SD1] (LN11-1)	土師器 高环坏部	口径 16.4 残存器高 4.55	外縫のみ残存。 底部から斜め上方に聞いたもの。やや 直立気味に聞く口縫部をもつ。 底部外側に段をもつ。	口縫部内外面ヨコナダ調査。 底部内面は指彫刻が明瞭に残る。内 面はナダ調査。 内面に正放射状暗文。	飛鳥Ⅱ期
4-7	-	漢1 [SD1] (LN11-1)	土師器 高脚脚部	断面径 10.6 残存器高 2.1	脚部のみ残存。 大きいくぼみ部。端部は丸くおさまる。	外縫は摩滅のため調査不明。 脚部前面には段以上に指彫刻が残 る。	飛鳥Ⅱ期
4-8	-	漢1 [SD1] (LN11-1)	土師器 甕	体部最大径 12.0 残存器高 6.5	体部のみ残存。 体部はあまり張り出すことなく、丸み をもつ。	体部外面上部は縱方向の刷毛目、下部 は不規則の刷毛目。 内面は不定方向のナダ削り調査。	飛鳥Ⅱ期
4-9	-	漢1 [SD1] (LN11-1)	土師器 甕	口径 17.6 体部最大径 18.1 残存器高 11.0	底部欠損。 「く」の字に外反する口縫部。端部は外 縫する形を呈する。体部はあまり張り 出すことなく、丸みをもつ。	体部前面は摩滅しているが、かすかに 刷毛目らしさと痕跡が確認できる。内面 は左から右へ上方に向かうヘラ削り調査。	飛鳥Ⅱ期
4-10	-	土坑7 [SK7] (LN03)	黑色土器 甕	口径 15.0 残存器高 4.7	底部欠損。 底部から斜め上方に聞いたもの。わざ かに屈して直立気味に聞く口縫部を もつ。	内窓( A 部)。 口縫部内外面はヨコナダ調査。 体部外正面部より下は横方向のヘラ 磨き調査。内面も横方向のヘラ磨き調 査。	平城Ⅲ期
4-11	6-11	土坑8 [SK8] (LN16)	土師甕 土罐	残存径 5.85 厚さ 1.6 円筒径 0.7	平面形は長方形の円柱状の土罐。	手すべね成型。 全体に摩滅のため調査不明。	
4-12	-	土坑8 [SK8] (LN16)	丸K	残存径 17.7 残存幅 21.5 厚さ 2.4	おそらく玉縁式丸K。 中央部から広縫部のみ残存。	凸面は綱目タタキ調査の後、一部すり 削している。 凹面は直角の縫目(8本/cm)が認めら れるが、一部取り消している。 広縫部は凸面に面取りをしている。 側面と前面を面取りしている。	
4-13	-	土坑10 [SK10] (LN100)	頭部器 耳身	口径 16.8 高台径 13.4 高台高 0.45 器高 5.0	体部から口縫部にかけて直線的に大き く開く。 底部は平底で、外側に膨らむ壺形の 高台が付く。	体部から口縫部にかけて、内外面とも 回転ナダ調査。 底部内面はヘラ削りのあと、ナダ調査。 高台は貼り付け。 他成は良好、堅緻。	TK7型式あるいは 平城Ⅲ期
4-14	-	土坑10 [SK10] (LN100)	土師器 坪	口径 19.5 器高 3.65	底部中央は欠損。 半球状の底盤から、緩やかなカーブを描 きながら立ち上がり。口縫部で外反し ためら、端部がまみあげるように立 ち上がる。	底部外面はヘラ削り調査。 内面は剥離のため調査不明。	平城Ⅲ期
4-15	-	土坑10 [SK10] (LN100)	土師器 甕	口径 21.6 器高 2.3	底部中央は欠損。 平坦な底盤から、緩やかなカーブを描 きながら聞く口縫部をもつ。 口縫端部はわざかに外反して丸くおさ まる。	体部から口縫部にかけて、内外面とも 横ナダ調査。 底部外面には、ナダ下に指彫刻がわ ざかに残る。 内面には正放射状暗文。	平城Ⅲ期

表3 遺物観察表（その2）

排卵 巣場 巣号	巣場 巣号	造営 土巣	種類	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
4-16	-	土坂 10 [SK10] (LN100)	土師器 甕	口径 16.1 残存高 3.1	口縁部のみ残存。 口縁部は大きく外反し、端部はつまみあがき。	内外面とも横ナデ調整。	
4-17	-	土坂 10 [SK10] (LN100)	須恵器 甕	口径 8.6 基盤部径 5.8 残存高 4.55	口縁部と肩部が残存。 口縁部は上方に残り、端部でささらに大きくなり水平状の形。全体欠損しているが、丸みをもって残してあると推測される。また、底部には高台の壠と推測される。	口縁部内外面とも回転ナデ調整。 河岸外面は自然崩が付着していたのが削離して崩れ落ち、調整不明。内面はナデ調整。機能は良好、堅巣。	平城二期
4-18	-	土坂 12 [SK12] (LN64)	須恵器 壺身	口径 13.4 高台径 9.4 底径 4.3	体部から縁部にかけて直線的に大きくなっている。 底面は平底で、外側にわずかに踏ん張る傾向の高台付近。	体部から口縁部にかけて内外面とも回転ナデ調整。両台は貼り付け。機能は良好、堅巣。	TK6 型式あるいは 平城二期
4-19	6-19	土坂 12 [SK12] (LN64)	土師器 甕	口径 17.95 器高 3.0	平な底面から、緩やかカーブを描きながら開く口縁部をもつ。 口縁部内面は残すをもつ。	口縁部内外面とも横ナデ調整。 底部外面には崩壊直前の崩れがある。内面はナデ調整。底部外面に黒斑がある。	平城二期
5-20	-	土坂 13 [SK13] (LN78)	須恵器 壺身	口径 12.6 器高 4.0	平な底部から外側しながら開く口縁部をもつ。 口縁部は丸くおさまる。 底面は平底である。	体部から口縁部にかけて内外面とも回転ナデ調整。 底部外面に手持ちハレ削り調整。内面は回転ナデ調整。 内底面には直線状のナーフ記号が1本認められる。機能は良好、堅巣。	TK21 型式あるいは 平城二期
5-21	-	土坂 13 [SK13] (LN78)	製塗土器	口径 10.0 残存高 5.3	体部は斜面に緩やかに開いたのち、 口縁部に突っ立てる。 口縁部上端部に平坦な面をもつ。	外側は摩擦のため調整不明。内面はナデ調整。	
5-22	-	土坂 13 [SK13] (LN78)	製塗土器	口径 8.35 残存高 3.15	体部は内側したのち口縁部で外反して、 いわゆる錐形状をなす。 口縁部内面は残すをもつ。	口縁部内外面ともナデ調整。 体部は摩擦のため調整不明。内面はナデ調整直後の崩壊直前の面が残る。	
5-23	-	土坂 13 [SK13] (LN78)	製塗土器	残存高 2.85	底面のみ残存、丸底である。	全体には摩擦が著しく、調整不良。	
5-24	-	土坂 15 [SK15] (LN167)	製塗土器	口径 9.7 残存高 4.0	狭狭の体部がそのままのびて口縁部に至る。 口縁部は内側するをもつ。	内外面とも摩擦のため調整不良。 内面には崩壊直後の裏面が残る。	
5-25	-	土坂 14 [SK14] (LN90)	須恵器 壺身	基盤部径 3.5 残存高 12.6	基盤部底面から脚柱部にかけて残存。 脚柱部は斜面に残る。 脚柱部中央には底面が2条残る。	脚柱部は回転ナデ調整。ハレ削り時のロクロの回転方向は外回り、内面は回転ナデ調整。 内面には絞り口が明瞭に残る。機能は良好、堅巣。	TK209 型式
5-26	6-26	土坂 14 [SK14] (LN90)	須恵器 はぞう	口径 9.6 残存高 7.3	体部のみ残存。 底面から脚柱に向かって約 1/3 の位置に 脚柱がある。脚柱は2条の直線が脚柱 をつなぎ、それら沈没の間にハラ の脚柱部が施されている。	内丸で下から口縁部にかけて回転ヘ ラ削り調整。ハレ削り時のロクロの回転 方向は外回り。そのほかは内外面とも回 転ナデ調整。 機能は良好、堅巣。	TK209 型式
5-27	-	土坂 14 [SK14] (LN90)	須恵器 台部	瓶部径 9.7 残存高 2.3	瓶部のみ残存。 下方に内側膨らむような形状である。 瓶部底面は平面をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。 機能は良好、堅巣。	TK209 型式
5-28	6-28	土坂 14 [SK14] (LN90)	須恵器 甕	基盤部径 4.45 体部最大径 16.6 残存高 11.7	体部のみ残存。 底面から脚柱に向かって約 1/3 の位置に 脚柱がある。脚柱は2条の直線が脚柱 をつなぎ、それら沈没の間にハラ の脚柱部が施されている。	脚柱部から底面にかけての外壁は回転ヘ ラ削り調整。ハレ削り時のロクロの回転 方向は左回り。そのほかは内外面とも回 転ナデ調整。 機能は良好、堅巣。	TK209 型式
5-29	-	土坂 14 [SK14] (LN90)	須恵器 甕	口径 20.25 残存高 4.4	狭狭体部から外反して外方へ水平にのび る丸脚柱部をもつ。 口縁部は丸くおさまる。	内外面とも回転ナデ調整。 機能は良好、堅巣。	TK209 型式
5-30	6-30	土坂 14 [SK14] (LN90)	須恵器 粗底甕	口径 7.6 基盤部径 7.45 体部最大径 12.3 器高 8.9	口縁部は倒立した後、聞く。口縁部は 丸くおさまる。 体部は底面から脚柱に向かって約 2/3 の 位置に最大幅をもつ。 底面は平底に近い。	口縁部外面のみ、体部内外面は回転ナデ調 整。底面外面は回転ヘラ削り調整の跡。 ハレ削り時のロクロの回転方向は左回り。 内面には回転ヘラ削り調整。 機能は良好、堅巣。	TK16 型式、あるいは 飛鳥中期
5-31	-	土坂 14 [SK14] (LN90)	土師器 高环	瓶部径 7.4 残存高 7.3	瓶部底部と脚柱部が残存。 脚柱部は中空に近いが、中空と表記す べからではない。 瓶部は大きく広がり、脚柱は丸くおさま る。	瓶部外面はナデ調整。 内面は摩擦のため調整不良。 脚柱部外面はナデ調整。内面は崩壊直が 明瞭に残る。	飛鳥中期
5-32	6-32	土坂 27 [SK27] (LN456)	須恵器 壺身	口径 10.5 器高 2.95	天井部と口縁部を残ける様で空巣はま ったと認める。 口縁部は外に開いて、丸くおさまる。	天井部外面はハラ削り未調整。 そのほかは内外面とも回転ナデ調整。 機能は良好、堅巣。	TK217 型式
5-33	-	土坂 27 [SK27] (LN456)	須恵器 壺身	口径 11.0 器高 3.25	天井部と口縁部を残せる様で空巣はま ったと認められない。 口縁部は口内火気隙である。	天井部外面は一定方向のナデ調整。 そのほかは内外面とも回転ナデ調整。 機能は良好、堅巣。	TK217 型式

表3 遺物観察表(その3)

番号	面番号	遺構 土層	種類	法量(cm)	断面の特徴	技法の特徴	備考
5-34	6-34	土焼 27 [SK27] (LN456)	氣泡器 壺蓋	口径 10.6 高さ径 8.4 つまみ径 1.5 つまみ高 1.1 器高 3.7	丸みをもつ天井部から、ならだかに口縁部にぐるり。口縁部はよくおさまる。 口縁部内部にかかりをもつが、かかりの先端が口縁部以下に突出することはない。天井部には小さな宝珠形のつまみをもつ。	天井部外面は回転ヘラ削り調査のもの。 つまみ貼り付けのために一部削りナダ調査。 ヘラ削り時のコクロの回転方向は左回り。 内部は不定方向のナダ調査。 そのほかは内外面とも回転ナダ調査。 燒成は良好、堅密。	TK217～TK46 型式
5-35	7-35	土焼 27 [SK27] (LN456)	氣泡器 短頸壺	口径 6.3 体部最大径 11.3 器高 8.2	口縁部は短く、大きめ外反して開く。 体部は底部から腹部に向かって約1/3の位置に最大径をもつ。 底部はやや丸をもつ。	口縁部から体部内外面は回転ナダ調査。 底部外面は手斧打ち削り、内面はナダ調査。 底部外面に「辛」の漢文字に類似するヘラ跡が施されている。 焼成は良好、堅密。	
5-36	7-36	土焼 27 [SK27] (LN456)	氣泡器 無蓋高杯	口径 10.45 脚基部径 4.1 気泡器高 4.7	口縫部と脚基部のみ残存。 脚部は壺蓋の壺蓋を逆にして形をもつ。 口縁部は右回りして開く。 脚部は底部に向かってなだらかに開く形態をもつことしか分かない。	口縫部外面は回転ナダ調査。 底部外面は回転ヘラ削り調査。ヘラ削り時のコクロの回転方向は右回り。 内面はナダ調査。脚部は内外面とも回転ナダ調査。燒成はやや薄く、軟食。	TK217 型式期
5-37	-	土焼 27 [SK27] (LN456)	土師器 壺	口径 12.2 内蔵器高 3.35	底部は丸形、斜め上方に開く口縫部と丸みのある体部をもつ。口縫部は内傾して面をもつ。	口縫部内外面とも横ナダ調査。 そのほかはナダ調査。 内面に正弦状波文。	飛鳥田原
5-38	7-38	土焼 27 [SK27] (LN456)	土師器 壺	口径 11.6 内蔵器高 3.95	底部は丸形、斜め上方に開く口縫部と丸みのある体部をもつ。口縫部は内傾して面をもつ。	口縫部内外面とも横ナダ調査。 そのほかはナダ調査。 内面に正弦状波文。	飛鳥田原
5-39	-	土焼 27 [SK27] (LN456)	土師器 壺	口径 12.2 内蔵器高 4.7	口縫部から体部上半にかけて残存。 「く」の字で外傾して開く口縫部と、張り出さない体部をもつ。	口縫部外面は摩滅のため調査不明。内面は機械的削りの明瞭。体部外面は機械的削毛目。内面はナダ調査下に指頭圧痕が残る。	飛鳥田原
6-40	-	獨立立墳物 1 [SK1-98] (LN103)	氣泡器 壺身	口径 14.1 内蔵器高 3.65	平坦な底盤から大きめ外傾しながら開く。 口縫部はもつ。口縫部は丸くおさまる。 底盤は平底である。	底盤は丸形のため調査不明。 口縫部は口縫部にかけての内面、内底面は回転ナダ調査。底盤外面はヘラ削り後、ナダ調査。焼成は良好、堅密。	平城直期
6-41	-	獨立立墳物 3 [SK3-98] (LN105)	丸瓦	内蔵 17.0 内蔵幅 10.1 厚さ 2.5	おそらく三輪式丸瓦。	凸面は底盤のため調査不明。 凹面は布の目(7本/cm)と粗い合せ模様が認められる。	
6-42	7-42	ピット 39 [SPW9] (LN11-4)	黑色土器 壺	口径 9.6 器高 2.3	匂い坏である。 底盤から外傾して開く口縫部をもつ。	内底(人面)、外面は横方向へのヘラ削き調査。 内面は回転ナダ調査の後に機械方向へのヘラ削き調査。底部内外面とも一定方向のヘラ削き調査。	9世紀前半
6-43	-	ピット 52 [SPW12] (LN29)	氣泡器 壺身	口径 12.3 内蔵器高 3.25	平坦な底盤から外傾しながら開く口縫部をもつ。口縫部は丸くおさまる。	底盤は丸形のため調査不明。 口縫部外面は横ナダ調査。底盤外面はナダ調査。燒成は良好、堅密。	TK21 型式あるいは 平城Ⅱ期
6-44	-	ピット 65 [SPW5] (LN11)	土師器 壺	口径 20.8 器高 2.1	上げ底盤の平坦な底盤から内側した後、外側に開く口縫部をもつ。口縫部は内側に巻き込むよう丸をもつ。	口縫部外面は横ナダ調査。底盤外面はヘラ削り調査。内面は斜放状波文。	平城直期
6-45	7-45	ピット 76 [SPW6] (LN128)	土師器 壺	口径 10.05 内蔵器高 2.75	丸みをもつ体部から、外反して開く口縫部をもつ。体部と底盤の境には凸凹部がある。 口縫部は丸くおさまる。	口縫部は内面とも指頭圧痕が残る。内面は横ナダ調査。	平城直期
6-46	7-46	ピット 76 [SPW6] (LN128)	土師器 壺	口径 9.7 器高 2.5	丸底気泡ではあるが、平底から斜め上方に開く口縫部をもつ。口縫部は内側して凹面を呈する。	口縫部は内外面とも横ナダ調査。	平城直期
6-47	-	ピット 79 [SPW7] (LN122)	切き石	最大長 7.2 底盤大幅 6.7 厚さ 5.65	円形で底平な切き石。	平安前葉、画面中央と、側壁間に敵打痕が認められる。側面に火を受けて黒くなっている部分がある。	
6-48	7-48	ピット 96 [SPW6] (LN76)	氣泡器 壺蓋	口径 14.5 つまみ径 2.1 つまみ高 0.85 器高 2.15	天井部中央に陽文にはなってきているが、宝珠つまみをもつ。 口縫部は下方に丸く延び、端部は丸くおさまる。	天井部はヘラ削り調査。 天井部外面は不定方向のナダ調査。そのほかは回転ナダ調査。つまみは貼り付け、貼り付けたため、天井部のヘラ削り調査の一側はナダ削されている。	TK21 型式あるいは 平城II期
6-49	-	ピット 96 [SPW6] (LN76)	土師器 壺	口径 17.15 内蔵器高 7.35	口縫部から体部中央部にかけて残存。 「く」の字で外反して開く口縫部をもつ。 口縫部は外傾して面をもつ。 肩部には縫をもつ。	口縫部は内外面とも横ナダ調査。 体部は内外面ともナダ調査。	平城II期
6-50	-	ピット 96 [SPW6] (LN76)	土師器 壺	口径 19.5 内蔵器高 5.25	口縫部から体部中央部にかけて残存。 口縫部は丸く外傾して開く。口縫部は上部で凹面を呈する。体部ははほとんどの口縫部に出さないが、肩部に段段をもつ。	口縫部は内外面とも横ナダ調査。 体部外面は剥離のため調査不明。内面はナダ調査。	平城II期
6-51	-	ピット 97 [SPW7] (LN86)	土師器 壺	口径 17.0 内蔵器高 5.25	底盤は丸形。 体部は内側して立ち上がり口縫部に至る。口縫部は丸くおさまる。	全体に摩滅しているため調査は不明。	平城II期

表3 遺物観察表(その4)

件名 番号	図版 番号	遺構 土層	種類	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
6-52	-	ビット100 [SP100] [LN96]	土器部 外	口径 18.7 残存器高 3.45	底面部は欠損。体部で内側した後、外反して開く口縫部をもつ。口縫部はわずかに内側に巻き込んで丸くおさまる。	口縫部内外面とも骨ナガ調整。体部外縫はナガ調整。	平成Ⅲ期
6-53	-	ビット102 [SP102] [LN91]	直底器 外縫	高台径 8.9 高台高 0.5 残存器高 2.05	口縫部は欠損。 平底で高台をもつ。高台はやや内側に、「(v.)」の字形を呈する。	体部内外面とも回転ナガ調整。底部外面は「(v.)」の字形を呈する。	TK7型式あるいは平成Ⅲ期
6-54	-	ビット102 [SP102] [LN91]	直底器 外縫	高台径 11.0 高台高 0.6 残存器高 2.45	口縫部は欠損。 平底で高台をもつ。高台はやや内側に、「(v.)」の字形を呈する。	体部内外面とも回転ナガ調整。底部外面は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左回り。	TK7型式あるいは平成Ⅲ期
6-55	-	ビット102 [SP102] [LN91]	土器部 外	口径 14.4 残存器高 3.65	底面部は欠損。丸みをもつ追加部から、内側にした後、ほぼ直立して高台部に迫る。口縫部は内側に直線的に面をもつ。	底部外面はナガ調整。表面は直線的ため調査不明。	TK209型式
6-56	-	ビット123 [SP123] [LN267]	直底器 外縫	口径 12.2 残存器高 2.8	天井部は欠損。天井部とロ縫部の境界にわずかある突起が認められる。口縫部は外反して開く。	内面と外縫も骨ナガ調整。機能は良好、堅繩。	TK209型式
7-57	7-57	落ち込み532 [LN244]	直底器 外縫	口径 14.3 ひさり径 12.2 つまみ径 2.45 つまみ高 0.7 器高 3.3	天井部は丸みをもち、などららに口縫部に至る。天井部にはささはあるが、つまり中央部はわざわざ凹面を呈する。ロ縫部内面にはえりをもつが、えりはロ縫部より下に出ることなく、かえり先端部は接着する。	天井部外面は回転ヘラ削り調整。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左回り。そのほか回転ナガ調整。 つまみは貼り付け。機能は良好、堅繩。	TK217型式
7-58	-	落ち込み532 [LN244]	直底器 外縫	口径 16.6 残存器高 5.2	底面部は欠損。体部からロ縫部に向けて、だらだらに内側なる。ロ縫部は内縫して面をもつ。	内面と外縫も骨ナガ調整。機能は良好、堅繩。	平成Ⅱ期か
7-59	-	落ち込み532 [LN244]	直底器 外縫	口径 20.2 基部直径 16.9 残存器高 8.4	ロ縫部から脚部にかけて複数。ロ縫部はだらかに外側にして傾く。ロ縫部は折り曲げて外方は中央に腰をもつ断面三角形の段をなす。	ロ縫部内外面とも回転ナガ調整。底部外面は平行タタキの後、カキ目調整。前面は同心円タタキの後、一部ナガ削している。前面に「(v.)」の字形のヘラ記号。機能は良好、堅繩。	TK209型式
7-60	-	落ち込み532 [LN244]	土器部 把手	残存器高 5.9	舌状の把手部のみ残存。おそらく壺の把手であろう。	調査は直線的ため不明であるが、把手の後で何時ものと考えられる指紋圧痕が残る。	平成Ⅲ期
7-61	-	落ち込み532 [LN244]	土器部 把手	残存器高 9.0	舌状の把手部のみ残存。おそらく壺の把手であろう。	おそらく壺と考えられる体部の外面は網目調査。内面はヘラ削り調整。把手部はナガ調査。	平成Ⅲ期
7-62	-	落ち込み531 [LN141]	直生土器 外縫	底径 9.9 残存器高 13.9	底面部のみ残存。わずかに上部に凹部。	体部上下に回転方向のヘラ削り調整。下下部は内側方向のヘラ削り調査。内面は直線的ため調査不明。外縫は直線的。手は生糸巻籠。	畿内～江戸様式期
8-63	-	包含層 [暗灰褐色土]	直底器 外縫	つまみ径 2.5 ひさみ高 1.2 残存器高 3.3	ロ縫部は欠損。丸みをもつ天井部の頂面には擬宝珠形のつまみが付く。	天井部外面は回転ヘラ削り調査の後、つまみを貼り付けるために一回転ナガ調査。ヘラ削り時のロクロの回転方向は左回り。そのほかは回転ナガ調査。ただし天井部中央部は回転ナガ調査の後、不定方向のナガ調査を加える。機能は良好、堅繩。	平成Ⅲ期
8-64	-	包含層 [暗灰褐色土]	直底器 外縫	口径 22.65 残存器高 1.9	天井部は欠損。天井部はやや錐形である。ロ縫部は短く底下して、端部で丸くおさまる。	天井部外面は回転ヘラ削り調査。ヘラ削り時のロクロの回転方向は右回り。そのほかは回転ナガ調査。機能は良好、堅繩。	平成Ⅲ期
8-65	7-65	包含層 [暗灰褐色土]	直底器 外縫	口径 14.3 ひさみ径 2.05 ひさみ高 0.7 器高 2.25	天井部はやや錐形で、頂面には中央部がわずかに凹面を呈する。羅平等なつまみが付く。ロ縫部は短く底下して、端部で丸くおさまる。	天井部外面は回転ヘラ削り調査の後、つまみを貼り付けるために一回転ナガ調査。ヘラ削り時のロクロの回転方向は右回り。そのほかは回転ナガ調査。ただし天井部中央部は回転ナガ調査の後、不定方向のナガ調査を加える。機能は良好、堅繩。	平成Ⅲ期
8-66	-	包含層 [暗灰褐色土]	直底器 外縫	口径 13.6 残存器高 1.6	天井部は欠損。天井部はやや錐形である。ロ縫部は短く底下して、端部で丸くおさまる。	天井部外面は自然輪付者のため、調査不明。そのほかは回転ナガ調査。機能は良好、堅繩。	平成Ⅲ期
8-67	-	包含層 [暗灰褐色土]	直底器 外縫	口径 18.3 残存器高 1.35	天井部は欠損。	天井部外面は回転ヘラ削り調査。ヘラ削り時のロクロの回転方向は右回り。そのほかは回転ナガ調査。機能は良好、堅繩。	平成Ⅲ期
8-68	-	包含層 [暗灰褐色土]	直底器 外縫	口径 13.1 残存器高 1.45	天井部は欠損。羅平等の天井部から。ロ縫部で短く底角に垂下して、尖り気味におさまる。	天井部外面は回転ヘラ削り調査。ヘラ削り時のロクロの回転方向は右回り。内面は輪付名で標識の後、不定方向のナガ調査を加える。そのほかは回転ナガ調査。機能は良好、堅繩。	平成Ⅲ期

表3 遺物観察表(その5)

探査番号	面番号	遺構土層	種類	法量(cm)	断面の特徴	法線の特徴	備考
8-69	-	包含層 [培灰褐色土]	須恵器 环甌	口径 13.0 残存器高 1.1	天井部頭は欠損。 縦平な天井部からロ縁部に向かって、少し外方へのびた後、ロ縁端部で強く内傾して、尖り気味におさまる。	天井部外面は回転ヘラ削り調査。ヘラ削り時ロクロの回転方向は右回り。 そのほかは切削ナブ調整。 焼成は良好、堅緻。	平城田原
8-70	-	包含層 [培灰褐色土]	須恵器 环甌	口径 14.4 残存器高 0.95	天井部頭は欠損。 縦平な天井部から、ロ縁端部で外方へ開き気味に強く垂下して、尖り気味におさまる。	天井部外面はヘラ切りナブ調査。頂部はつまみを貼り付けるための切削ナブ調整がある。そのほかは切削ナブ調整。 焼成は良好、堅緻。	平城田原
8-71	-	包含層 [培灰褐色土]	須恵器 环甌	口径 12.95 器高 3.7	体部は斜め上方に大きく開くロ縁部をもつ。 ロ縁端部は丸くおさまる。 底部はみをもとが平底。	底部外面はヘラ切りナブ調査。内面は不定方向のナブ調査。 そのほかは切削ナブ調整。 焼成は良好、堅緻。	平城田原
8-72	-	包含層 [培灰褐色土]	須恵器 环甌	口径 13.4 残存器高 3.65	体部は斜め上方に大きく開くロ縁部をもつ。 ロ縁端部は丸くおさまる。 底部はみをもとが平底。	底部外面はヘラ切りナブ調査。内面は不定方向のナブ調査。そのほかは切削ナブ調整。 焼成は良好、堅緻。	平城田原
8-73	-	包含層 [培灰褐色土]	須恵器 环甌	口径 13.5 高台径 8.6 高台高 0.5 器高 4.1	体部からロ縁部にかけて直線的に大きくなく開く。底部は平面で、「ハ」の字に開いて踏ん張る。断面四角形の高台が付く。 ロ縁端部は内側で接地する。	底部外面はヘラ切りナブ調査。 そのほかは切削ナブ調整。 高台は貼り付け。 焼成は良好、堅緻。	平城田原
8-74	-	包含層 [培灰褐色土]	須恵器 环甌	口径 12.6 高台径 9.2 高台高 0.35 器高 3.65	体部からロ縁部にかけて直線的に大きくなく開く。 底部は平面で、「ハ」の字に開いて踏ん張る。断面四角形の高台が付く。 ロ縁端部は内側で接地する。	底部はナブ調査。 そのほかは切削ナブ調整。 高台は貼り付け。 焼成は良好、堅緻。	平城田原
8-75	-	包含層 [培灰褐色土]	須恵器 环甌	口径 11.9 高台径 8.9 高台高 0.4 器高 3.8	体部からロ縁部にかけて外傾して開く。 底部は平面で、「ハ」の字に開いて踏ん張る。断面四角形の高台が付く。 ロ縁端部は平面で全体で接地する。	底部はナブ調査。 そのほかは切削ナブ調整。 高台は貼り付け。 焼成は良好、堅緻。	平城田原
8-76	8-76	包含層 [培灰褐色土]	須恵器 环甌	口径 13.0 高台径 8.8 高台高 0.5 器高 3.8	体部からロ縁部にかけて外傾して大きくなく開く。 底部は平面で、「ハ」の字に開いて踏ん張る。断面四角形の高台が付く。 ロ縁端部は内側で接地する。	底部外面はヘラ切り後、ナブ調査。 そのほかは切削ナブ調整。 高台は貼り付け。 焼成は良好、堅緻。	平城田原
8-77	-	包含層 [培灰褐色土]	須恵器 环甌	口径 12.6 高台径 8.2 高台高 0.5 器高 4.1	体部からロ縁部にかけて外傾して大きく開く。ロ縁端部は尖り気味におさまる。 底部は平面で、「ハ」の字に開いて踏ん張る。断面四角形の高台が付く。 ロ縁端部は内側で接地する。	底部外面はヘラ切り後、ナブ調査。 そのほかは切削ナブ調整。 高台は貼り付け。 焼成は良好、堅緻。	平城田原
8-78	-	包含層 [培灰褐色土]	須恵器 环甌	口径 13.5 高台径 8.6 高台高 0.5 器高 4.1	体部からロ縁部にかけて外傾して大きく開く。ロ縁端部は丸くおさまる。 底部は平面で、「ハ」の字に開いて踏ん張る。断面四角形の高台が付く。 ロ縁端部は内側で接地する。	底部外面はヘラ切り後、ナブ調査。 そのほかは切削ナブ調整。 高台は貼り付け。 焼成は良好、堅緻。	平城田原
8-79	8-79	包含層 [培灰褐色土]	須恵器 环甌	口径 12.8 高台径 7.6 高台高 0.45 器高 3.8	体部からロ縁部にかけて外方にのびて開く。た後、外反して開く。ロ縁端部は尖り気味におさまる。底部は平面で、「ハ」の字に開いて踏ん張る。断面四角形の高台が付く。高台端部は平面で全体で接地する。	内外面とも擦減のため調査不明。 焼成は不良、軟質。	
8-80	-	包含層 [培灰褐色土]	須恵器 环甌	口径 12.6 高台径 8.2 高台高 0.5 器高 4.1	体部からロ縁部にかけて外方にのびて開く。ロ縁端部は丸くおさまる。底部は平面で、やや内側で「ハ」の字に開いて踏ん張る。断面四角形の高台が付く。高台端部は平面で全体で接地する。	底部外面はヘラ切り後、ナブ調査。 そのほかは切削ナブ調整。 高台は貼り付け。 焼成は良好、堅緻。	平城田原
8-81	-	包含層 [培灰褐色土]	須恵器 环甌	口径 13.4 高台径 9.5 高台高 0.45 器高 4.0	体部からロ縁部にかけて外方にのびて開く。ロ縁端部は丸くおさまる。底部はほぼ平面で、やや内側で断面四角形の高台が付く。高台端部は平面で全体で接地する。	底部外面はヘラ切り後、ナブ調査。 そのほかは切削ナブ調整。 高台は貼り付け。 焼成は良好、堅緻。	平城田原
8-82	-	包含層 [培灰褐色土]	須恵器 环甌	口径 20.1 高台径 14.6 高台高 0.85 器高 6.5	体部からロ縁部にかけて外気味に上外方にのびて開く。ロ縁端部は丸くおさまる。底部はほぼ平面で、やや内側で断面四角形の高台が付く。高台端部は平面で全体で接地する。	底部外面はヘラ切り後、ナブ調査。 そのほかは切削ナブ調整。 高台は貼り付け。 焼成は良好、堅緻。	平城田原
8-83	-	包含層 [培灰褐色土]	須恵器 腹	口径 15.85 器高 1.5	底部は欠損しているが、平底であったと推測できる。口部部は外反して開く。ロ縁端部は上面で平面をもつ。	内外面とも切削ナブ調整。 焼成は良好、堅緻。	平城田原
8-84	-	包含層 [培灰褐色土]	須恵器 腹	口径 20.5 器高 2.2	底部は欠損しているが、平底であったと推測できる。口部部は外反して開く。ロ縁端部は外傾する平面をもつ。	底部外面は切削ヘラ削り調査。回転ヘラ削り時のロクロの回転方向は左回り。そのほかは切削ナブ調整。 焼成は良好、堅緻。	平城田原

表3 遺物観察表(その6)

件名 番号	図版 番号	遺構 土層	種類	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
8-85	-	包含層 [培灰褐色土]	裏應器 蓋	高台径 5.1 高台高 0.4 残存器高 2.05	底部のみ残存。 底部は平底で、「ハ」の字に開く。断面 内角の高台が付く。高台場部は平底で全 体角で接着する。	底部外面部は凹輪へラ削り。ヘラ削り時の クロクの削り軸方向は左回り、内面は回転 ナブ調整。外底面は摩滅のため調査不明。 高台は貼り付け。被覆は不良、軟質。	
8-86	-	包含層 [培灰褐色土]	裏應器 蓋	高台径 10.35 高台高 1.2 残存器高 3.8	底部と底部下部が残存。底部から全体 に向かってはそれほど張り出さず以上 にのみ。底部外面部には「ハ」の字に開 く高台をもつ。高台端部は内傾する形 を呈し、外側へ接続する。	底部外面部は凹輪へラ削り調査。 外底面はナブ調整。 そのほかは回転ナブ調整。 高台は貼り付け。 被覆は良好、堅緻。	
8-87	-	包含層 [培灰褐色土]	裏應器 蓋	口径 11.9 つまみ径 2.55 つまみ高 1.7 器高 3.9	有蓋短筒蓋の蓋で、尖端部は平らに仕上 げているが、中央部には凹みで窪む。 天井表面には宝珠の形をもぐく。 口縁部はほぼ直角に垂下し、端部で内側 に突出して丸くおさまる。	天井部外面部は自然熱加工のため調査不 明。内面は回転ナブ調整の後、不定方向 のナブ調整を行加する。 つまみ部は凹輪ナブ調整。 被覆は良好、堅緻。	平成Ⅲ期
8-88	-	包含層 [培灰褐色土]	土器器 身	口径 13.3 器高 3.9	丸みをもつ底盤から内側するようにのび た後、直立して口縁部に至る。口縁部 は丸くおさまる。	口縁部内外面ヨコナブ調整。 底部外面部は斜面と摩滅のため調査不 明。外面上には指屈正痕が残る。	平成Ⅲ期
8-89	-	包含層 [培灰褐色土]	土器器 身	口径 14.9 残存器高 3.6	底部中央部は欠損。丸みをもつ底盤から 内側するようにのびた後、直立して口縁部 に至る。口縁部は丸くおさまる。	口縁部内外面ヨコナブ調整。	平成Ⅲ期
8-90	8-90	包含層 [培灰褐色土]	土器器 身	口径 14.3 器高 3.85	丸みをもつ底盤から内側するようにのび た後、直立して口縁部に至る。口縁部 は丸くおさまる。	口縁部内外面ヨコナブ調整。 底部内外面は斜面と摩滅のため調査不 明。外面上には指屈正痕が残る。	平成Ⅲ期
8-91	8-91	包含層 [培灰褐色土]	土器器 身	口径 14.3 器高 3.9	やや上方底膨張の底盤から内側するよう にのびた後、わずかに内反して口縁部に 至る部分と、内側に巻き込むように口縁 部に至る部分がある。口縁部は丸くお さまる。	口縁部内外面ヨコナブ調整。 底部外面に指屈正痕が残る。	平成Ⅲ期
8-92	-	包含層 [培灰褐色土]	土器器 身	口径 14.7 残存器高 3.8	底部は欠損。丸みをもつ底盤から内側す るようになびた後、直立して口縁部に至 る。口縁部は丸くおさまる。	内外面ともヨコナブ調整。 底部外面に指屈正痕が残る。	平成Ⅲ期
8-93	-	包含層 [培灰褐色土]	土器器 身	口径 14.1 残存器高 3.4	底部は欠損。丸みをもつ底盤から内側す るようになびた後、外側にして口縁部に至 る。口縁部は丸くおさまる。	口縁部は外面部ヨコナブ調整。そのほか は摩滅のため調査不明。	平成Ⅲ期
8-94	-	包含層 [培灰褐色土]	土器器 身	口径 14.6 残存器高 3.6	底部中央部は欠損。丸みをもつ底盤から 大きめ内反して立ち上がり、その後と底 部内面にはなびらけた口縁部をもつ。 口縁部は丸くおさまる。	口縁部内外面ともヨコナブ調整。 底部内面はナブ調整。内面は摩滅のため 調査不明。	平成Ⅲ期
8-95	-	包含層 [培灰褐色土]	土器器 身	口径 13.2 器高 3.36	半底の底盤から、などらかなカーブを描い て口縁部に至る。口縁部は内傾して面を をもつ。	口縁部内外面ともヨコナブ調整。ただし外 面に一部不規方向ナブ調整が認められ る。底部外面上には指屈正痕が残る。	平成Ⅲ期
8-96	-	包含層 [培灰褐色土]	土器器 身	口径 13.8 残存器高 3.3	丸みをもつ底盤から、などらかなアーベー トを描いて口縁部に至る。口縁部は逆かに 外反して開く。口縁部は内傾して面を をもつ。	口縁部内外面ともヨコナブ調整。 底部外面上には指屈正痕が残る。	平成Ⅲ期
8-97	-	包含層 [培灰褐色土]	土器器 身	口径 12.9 器高 3.6	底盤の底盤から、などらかなカーブを描い て口縁部に至る。口縁部は内傾して面を をもつ。	口縁部周辺は斜面のため調査不明。そ のほかは内外面ともヨコナブ調整。 底部外面上には指屈正痕が残る。	平成Ⅲ期
8-98	8-98	包含層 [培灰褐色土]	土器器 身	口径 14.7 器高 3.35	やや上方底膨張の底盤から内側上方に ひびて開け口縁部をもつ。口縁部は内傾 する面をもつ。	口縁部内外面ともヨコナブ調整。底部外 面は一部ヨコナブ調整が施されている が、指屈正痕が残る。内面はヨコナブ調 整が施されているが、中央部に不定方向 のナブ調整が認められる。	平成Ⅲ期
8-99	-	包含層 [培灰褐色土]	土器器 身	口径 15.1 残存器高 3.5	底盤は欠損。底盤から内側上方になどら かなカーブ描いて口縁部に至る。 口縁部は外傾して開く。口縁部は内傾 して面をもつ。	口縁部内外面はヨコナブ調整。 底部外面上には指屈正痕が認められる。	平成Ⅲ期
8-100	-	包含層 [培灰褐色土]	土器器 身	口径 13.2 器高 3.55	半底に近いが、丸みをもつ底盤から内側 しなびたのびた後、口縁部付近で直立し た後外反する。口縁部は内傾して面を をもつ。	口縁部内外面はヨコナブ調整。 底部外面上には指屈正痕が残る。内面は摩 滅のため調査不明。	平成Ⅲ期
8-101	8-101	包含層 [培灰褐色土]	土器器 身	口径 14.2 器高 3.7	上げる底の底盤から内側しながらのびた 後、口縁部付近で直立した後外反する。 口縁部は内傾して面をもつ。	口縁部内外面はヨコナブ調整。底部外面上 には一部ヨコナブ調整が施されている が、指屈正痕が残る。内面はヨコナブ調 整。	平成Ⅲ期
8-102	-	包含層 [培灰褐色土]	土器器 身	口径 19.0 残存器高 4.4	底盤は欠損。底盤から内側して立ち上 げる底の底盤付近で逆かに外反する。 口縁部は逆かに巻き込んで丸くおさま る。	口縁部内外面ともヨコナブ調整。 底部外面上にもナブ調整。 内面には放射状縮紋。	平成Ⅲ期

表3 遺物観察表（その7）

辨認番号	因版番号	遺構土層	種類	法量 (cm)	断面の特徴	技法の特徴	備考
8-103	-	包含層 〔暗灰褐色土〕	土師器 壺	口径 19.8 残存器高 3.8	底部は欠損。 底部から内側に斜めに立ち上がり、口縁部付近で直立状態にひびて開く口縁部をもつ。口縁部内側で面をもつ。	口縁部外面はヨコナガ調整。 体部外面はナガ調整の後、横方向のヘラ削り調整。 内面はヨコナガ調整の後斜方向削り。	平成IV期
8-104	-	包含層 〔暗灰褐色土〕	土師器 耳	口径 19.1 残存器高 5.1	底部は欠損。 丸みをもつ底部からなどらかに内側両手をもつをながらにのび、口縁部付近でほぼ垂直に立ち上る。口縁部は上面で面をもつながら、わずかに巻き込む。	口縁部外面はヨコナガ調整。 体部外面はナガ調整であるが、ナガ調整下に相應圧痕が残る。 底部外面はヘラ削り調整。 体部から底部にかけての内面は削りのため調整不明。	平成IV～V期
9-105	-	包含層 〔暗灰褐色土〕	土師器 鉢	口径 23.8 残存器高 10.9	底部は欠損。 底部から斜め上方にのび、口縁部付近で内側に斜めに立ち上る。口縁部は上面で面をもつながら、大きくおさまる。	口縁部外面ともヨコナガ調整。 体部外面は相應圧痕が残る。 内面はナガ調整。	平成V期
9-106	-	包含層 〔暗灰褐色土〕	土師器 鉢	口径 17.5 残存器高 4.75	底部は欠損。 斜め上方に立ち上った後、直立状態に外側に斜めに縁部に至る。口縁部は内側に巻き込み、丸くおさまる。	口縁部外面ともヨコナガ調整。 体部外面はヘラ削り調整。 内面はナガ調整。	平成IV期
9-107	-	包含層 〔暗灰褐色土〕	土師器 鉢	口径 21.3 残存器高 5.6	底部下部から底面にかけて欠損。 内側して立ち上った後、外反して口縁部に至る。口縁部は内側で面をもつ。	全体に摩滅のため調整不明。	平成V期
9-108	-	包含層 〔暗灰褐色土〕	土師器 皿	口径 20.1 器高 3.3	底部中央に欠損。 斜めから内側に曲線のように立ち上って後、外反して開く口縁部をもつ。口縁部は上面でわざわざ内回転面をなし、内側に巻き込む。	口縁部外面ともヨコナガ調整。 底部外面はヘラ削り調整。 内面は摩滅のため調整不明。 内面に放射状紋。	平成IV～V期
9-109	-	包含層 〔暗灰褐色土〕	土師器 器高	口径 19.8 器高 4.0	底部平底から、内側して立ち上った後、外反して開く口縁部をもつ。口縁部は内側に巻き込み、丸くおさまる。	口縁部外面ともヨコナガ調整。 底部外面はヘラ削り調整。 内面はナガ調整。	平成III～IV期
9-110	-	包含層 〔暗灰褐色土〕	土師器 皿	口径 20.1 残存器高 3.6	底部は欠損。 底部から内側して立ち上った後、外反して大きくなり開く口縁部をもつ。口縁部は内側に巻き込んで丸くおさまる。	口縁部外面ともヨコナガ調整。 ただし一部摩滅のために荒れた部分もある。 底部外面はヘラ削り調整。 内面はヨコナガ調整。	平成III～IV期
9-111	8-111	包含層 〔暗灰褐色土〕	土師器 皿	口径 17.5 器高 3.25	平底から、内側して立ち上った後、外反して開く口縁部をもつ。口縁部はわずかに内側に巻き込み、丸くおさまる。また、口縁部外面に「条の状線も認められる」。	口縁部外面ともヨコナガ調整。 底部外面と内面との摩滅のため調整不明であるが、底部外面には相應圧痕と水の泡の圧痕が残る。 内面には一段の放射状紋と内底面には摩滅跡。	平成II期
9-112	-	包含層 〔暗灰褐色土〕	土師器 皿	口径 20.5 残存器高 2.6	底部は欠損。 やや丸みをもつ平底から、内側して立ち上った後、大きく外反して開く口縁部をもつ。口縁部は内側に巻き込み丸くおさまる。	口縁部外面ともヨコナガ調整。 底部外面はナガ調整下に相應圧痕が残る。 内面はナガ調整。	平成III～IV期
9-113	-	包含層 〔暗灰褐色土〕	土師器 皿	口径 20.4 器高 2.15	底部中央に欠損。 平底から内側に曲線のように立ち上って後、外側にながら開く口縁部をもつ。口縁部は内側に巻き込み、丸くおさまる。	口縁部外面はヨコナガ調整。 底部外面は相應圧痕が残る。 内面はヨコナガ調整。 内面に放射状紋。	平成IV期
9-114	-	包含層 〔暗灰褐色土〕	土師器 皿	口径 21.5 器高 2.3	平底から、斜め上方に開く口縁部をもつ。口縁部は内側に巻き込み、丸くおさまる。	口縁部の外面ともヨコナガ調整。 底部外面はヘラ削り調整下に相應圧痕が残る。 内面はヨコナガ調整。	平成IV期
9-115	8-115	包含層 〔暗灰褐色土〕	土師器 皿	口径 21.8 器高 2.75	上部底から、斜め上方に開く口縁部をもつ。口縁部は内側に巻き込み、丸くおさまる。	口縁部の外面ともヨコナガ調整。 底部外面はヘラ削り調整。 底部外面には「条の状線も認められる」。	平成V期
9-116	-	包含層 〔暗灰褐色土〕	土師器 皿	口径 17.5 残存器高 2.5	平底から、斜め上方に開く口縁部をもつ。口縁部は内側に巻き込み、丸くおさまる。	口縁部の外面ともヨコナガ調整。 底部外面はナガ調整下に相應圧痕が残る。 内面はヨコナガ調整。	平成IV～V期
9-117	-	包含層 〔暗灰褐色土〕	土師器 皿	口径 18.2 器高 2.75	底部は欠損。 ほほ平らな底盤から、大きく外反しながら開く口縁部をもつ。口縁部は内側に巻き込み丸くおさまる。	口縁部の外面ともヨコナガ調整。 底部外面はヘラ削り調整。 内面はナガ調整。	平成IV期
9-118	-	包含層 〔暗灰褐色土〕	土師器 皿	口径 19.6 残存器高 1.95	底部は欠損。 ほほ平らな底盤から、なだらかに外側にながら開く口縁部をもつ。口縁部は内側に巻き込み丸くおさまる。	口縁部の外面ともヨコナガ調整。 そのほかは摩滅のため調整不明。	平成IV～V期
9-119	-	包含層 〔暗灰褐色土〕	土師器 皿	口径 22.1 残存器高 2.4	底部は欠損。 ほほ平らな底盤から、なだらかに外側にながら開く口縁部をもつ。口縁部は上端で面をもち、内側に巻き込みで丸くおさまる。	口縁部の外面ともヨコナガ調整。 底部外面は相應圧痕下に相應圧痕が残る。 内面に放射状紋。	平成V期
9-120	-	包含層 〔暗灰褐色土〕	土師器 皿	口径 22.4 器高 2.1	底部中央に欠損。 平底から内側に曲線のように立ち上って後、外反して開く口縁部をもつ。口縁部は内側に巻き込む。	口縁部の外面ともヨコナガ調整。 底部外面は相應圧痕下に相應圧痕が残る。 内面に放射状紋。	平成IV期

表3 遺物観察表(その8)

件名 番号	図版 番号	遺構 土層	種類	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
9-121	9-121	包含層 [暗灰褐色土]	土師器 皿	口径 13.8 高台径 10.1 高台高 0.35 器高 3.25	平底から斜め上方にのびる口縫部をもつ。口縫部は丸くおさまる。 底部端には「ハ」の字に原く断面四角の高台をもつ。高台の内側で接地する。 高台端はつまみ様に張り出する。 高台端は全体に接地する。	口縫部内外面ともヨコナダ調整。 底面外面はヘラ削り調整下に指縫圧痕が残る。内面は摩滅のため調整不明。高台は貼り付け。内面には二段の施射状跡文(ただし下段の縁文はわめて短い)と内底面には瓶底状跡文。	平城II~Ⅲ期
9-122	-	包含層 [暗灰褐色土]	土師器 皿	高台径 19.6 高台高 0.95 残存器高 1.5	高台部分のみ残存。大きく「ハ」の字に開く。断面が扇形に近い。高台をもつ。 高台端はつまみ様に張り出する。	全底に剥離摩滅のため調整不明。 高台は貼り付け。	
9-123	-	包含層 [暗灰褐色土]	土師器 皿	口径 22.3 高台径 18.6 高台高 0.55 器高 2.65	底部は丸根。 おそらく平底から。内面で立ちあがった後、外反して開く後円部をもつ。口縫部は丸根で面をもつ。底端部には「ハ」の字に原く断面四角の高台をもつ。 高台端はほぼ全体で接地する。	口縫部内外面ともヨコナダ調整。 底面外面はヘラ削り調整。内面はヨコナダ調整。高台は貼り付け。内面には放射状の縁文と内底面には瓶底状跡文。	平城Ⅲ期
9-124	-	包含層 [暗灰褐色土]	土師器 碗	残存器高 8.3	脚柱部のみ残存。 脚柱状の脚柱部である。	外底はヘラで10面の面取りが施されている。内面は粘土の練ぎ目と指縫圧痕が残る。	
9-125	-	包含層 [暗灰褐色土]	土師器 甕	口径 13.0 残存器高 5.65	体部下半から底面にかけて欠損。 口縫部は「く」の字に外反して開く。ロ縫端部は上面をもつ。一条の沈巻が残る。体部は軽くにかかわるに設をもつ。張り出さずにゆるやかなカーブを描いて底部に至る。	口縫部内外面ともヨコナダ調整。 体部外面は指縫圧痕が残る。内面はヘラ削りの後、ナダ調整。	平城Ⅲ期
9-126	-	包含層 [暗灰褐色土]	土師器 甕	口径 14.3 残存器高 5.3	体部下半から底面にかけて欠損。 ロ縫部は「く」の字に外反して開く。ロ縫端部は上面をもつ。一条の沈巻が残る。体部は軽くにかかわるに設をもつ。張り出さずにゆるやかなカーブを描いて底部に至る。	口縫部内外面ともヨコナダ調整。	
9-127	-	包含層 [暗灰褐色土]	土師器 甕	口径 16.1 残存器高 6.6	体部下半から底面にかけて欠損。 ロ縫部は「く」の字に外反して開く。ロ縫端部は丸くおさまる。 体部は軽くにかかわるに設をもつ。張り出さずにゆるやかなカーブを描いて底部に至る。	ロ縫部外面はヨコナダ調整。 そのほかは摩滅のため調整不明。	
9-128	9-128	包含層 [暗灰褐色土]	土師器 甕	口径 10.8 器高 8.0	ロ縫部は外反して開く。 ロ縫端部はつまみ上げて唇をきむ。体部は半球形に近い。体部がロ縫部より張り出さとはしない。 底部は丸底である。	ロ縫部内外面ともヨコナダ調整。 体部上外面は扇方向の刷毛目調整。下半分摩滅のため調査は不明であるが、指縫圧痕が残る。内面は半球方向のナダ調整。下半分は不定方向のナダ調整。体部外側には底付付着している。	
9-129	-	包含層 [暗灰褐色土]	土師器 甕	口径 13.1 残存器高 4.5	体部下半から底面にかけて欠損。 ロ縫部は「く」の字に外反して開く。ロ縫端部はつまみ上げて唇をきむ。体部はロ縫部より張り出さとはなく、ゆるやかなカーブを描いて底部に至る。	ロ縫部内外面ともヨコナダ調整。	
9-130	-	包含層 [暗灰褐色土]	土師器 甕	口径 16.0 残存器高 5.5	体部下半から底面にかけて欠損。 ロ縫部は丸く、外反して開く。ロ縫端部は上面をもつ。体部はゆるやかに下外方に引く。ロ縫部より張り出さ。	ロ縫部内外面ともヨコナダ調整。	
9-131	-	包含層 [暗灰褐色土]	土師器 甕	口径 16.2 残存器高 4.0	体部下半から底面にかけて欠損。 ロ縫部は「く」の字に外反して開く。ロ縫端部はつまみ上げて唇をきむ。体部はロ縫部より張り出さ。	ロ縫部内外面ともヨコナダ調整。 体部外面に指縫圧痕が残る。内面は摩滅のため調査不明。	
9-132	-	包含層 [暗灰褐色土]	土師器 甕	口径 24.65 残存器高 6.35	体部下半から底面にかけて欠損。 ロ縫部は「く」の字に外反して開く。ロ縫端部はつまみ上げて唇をきむ。体部はロ縫部より張り出さ。	ロ縫部内外面ともヨコナダ調整。 体部外面は扇方向の刷毛目調整。内面はナダ調整。	
9-133	-	包含層 [暗灰褐色土]	土師器 甕	口径 18.6 残存器高 6.75	体部下半から底面にかけて欠損。 ロ縫部は大きめ外反して開く。ロ縫端部はつまみ上げて唇をきむ。体部はロ縫部より張り出さ。	ロ縫部内外面ともヨコナダ調整。 体部外面はナダ調整下に指縫圧痕が残る。内面は下から上方向へのヘラ削り調整。	
10-134	-	包含層 [暗灰褐色土]	土師器 甕	口径 24.4 残存器高 9.0	体部下半から底面にかけて欠損。 ロ縫部は大きめ外反して開く。ロ縫端部はつまみ上げて唇をきむ。体部はロ縫部より張り出さ。	ロ縫部内外面ともヨコナダ調整。 体部外面は扇方向の刷毛目調整。内面は下から上方へのヘラ削り調整。	

表3 遺物観察表（その9）

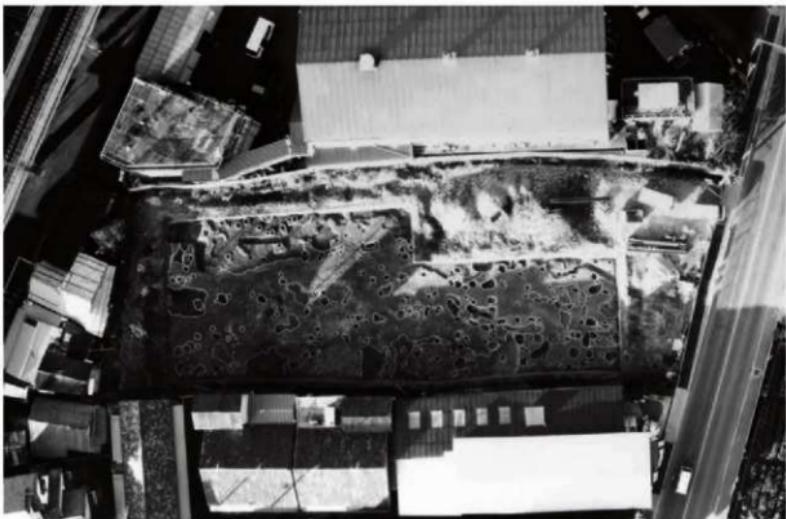
件名 番号	図版 番号	遺構 土層	種類	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
10-135	-	包含層 [培灰褐色土]	土師器 鉢釜	口径 28.1 脚径 29.3 脚部幅 2.9 残存器高 6.6	いわゆる長胴の羽足である。 体部から底部にかけて欠損。 口縁部は上外方に大きく開き、口縁端部 は丸くおさまる。 腹部に背が水平にのびる。	口縁部内面とも摩滅のため調整不明。 底部前面に横方向の刷毛目調査。 底部貼り付け部内面には指圧痕が残る。 脚前は貼り付けで、ヨコナギ調整が施されている。 胎土は生鉄西藍鐵。	
10-136	-	包含層 [培灰褐色土]	土師器 把手	残存器高 10.65	把手部のみ残存。 舌状の手である。	体部外面は刷毛目調査。 内部は刷毛目調査の後、一部ヘラ削り調 整。 把手部はナゲ調査。	
10-137	-	包含層 [培灰褐色土]	製塗土器	残存器高 5.3	口縁部のみ残存、小片のため口径は不明。 口縁部はゆるやかに外反する。口縁端部 は丸くおさまるが、内面に凹角く突起が 認められる。	外側は摩滅のため調整不明。内面はナゲ 調査。	
10-138	-	包含層 [培灰褐色土]	製塗土器	残存器高 5.45	体部の他残存箇所の体部をもつ。 器底は薄い。	内面はナゲ調査。外側は平行タキ調査。	
10-139	-	包含層 [培灰褐色土]	製塗土器	口径 12.7 残存器高 3.9	口縁部のみ残存。	全体に摩滅のため調整不明。内面に指圧 痕が残る。	
10-140	-	包含層 [培灰褐色土]	製塗土器	口径 11.4 残存器高 6.5	体部上半から口縁部にかけて残存。 外側でわずかに開く口縁部をもつ。口 縁端部は丸くおさまる。ほぼ筒状の体部 をもつ。器壁は薄い。	全体に摩滅のため調整不明。	
10-141	-	包含層 [培灰褐色土]	製塗土器	口径 10.9 残存器高 3.1	口縁部のみ残存。 大きく外傾して開く口縁部をもつ。口縁 端部は丸くおさまる。	全体に摩滅のため調整不明。内面に指圧 痕が残る。	
10-142	-	包含層 [培灰褐色土]	製塗土器	口径 13.9 残存器高 5.1	体部上半から口縁部にかけて残存。 細身の体部から上外方に大きく開きなが ら、内面して口縁部に至る。口縁端部は 丈夫気味におさまる。器壁は薄い。	全体に摩滅のため調整不明。	
10-143	-	包含層 [培灰褐色土]	製塗土器	口径 7.7 残存器高 7.3	体部上半から口縁部にかけて残存。 開口の体部から、ほぼそのまま直立して 口縁部に至る。口縁端部は丸くおさまる。	外側には指圧痕が残る。 内面は布目痕が認められる。	
10-144	-	包含層 [培灰褐色土]	製塗土器	口径 7.4 残存器高 4.8	体部上半から口縁部にかけて残存。 開口の体部から、ほぼそのまま直立して 口縁部に至る。口縁端部は丸くおさまる。	外側には指圧痕が残る。 内面は布目痕が認められる。	
10-145	-	包含層 [培灰褐色土]	製塗土器	口径 9.3 残存器高 6.2	体部上半から口縁部にかけて残存。 開口の体部から、ほぼそのまま直立して 口縁部に至る。口縁端部は丸くおさまる。 口縁端部内面付近に一条の沈線がある。	外側には指圧痕が残る。 内面は布目痕が認められる。	

# 図 版

図版 1



調査区遠景航空写真（調査前）



調査区全景航空写真



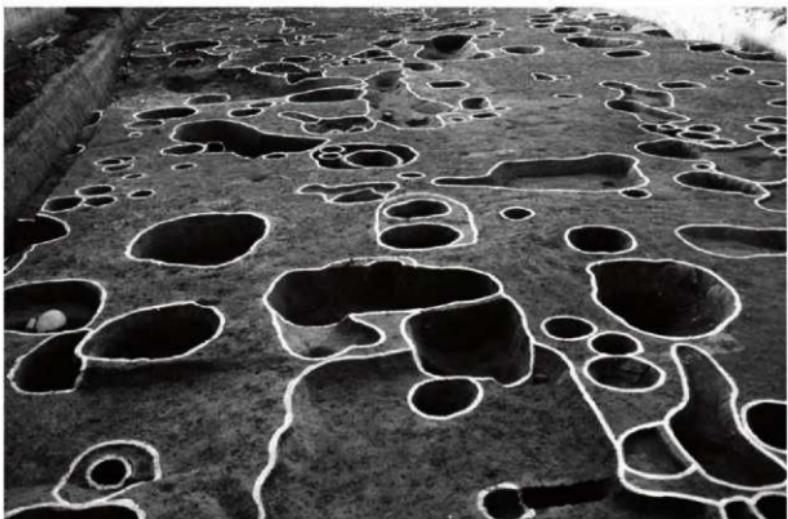
調査区近景（南東から）



調査区近景（北西から）



調査区西半部近景（北東から）



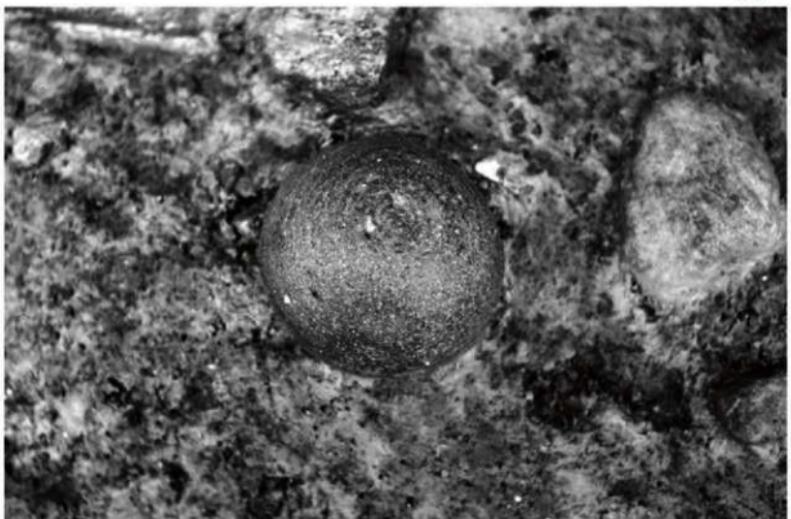
調査区東半部近景（東から）



SK14 遺物出土状況（東から）



SK14 円墳出土状況（南から）

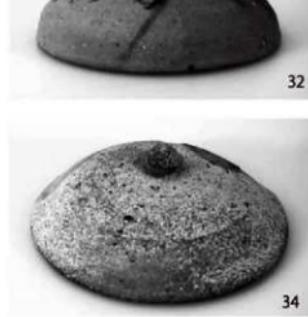
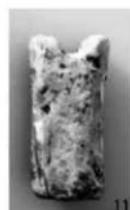


SK27 遺物 (35) 出土状況 (西から)

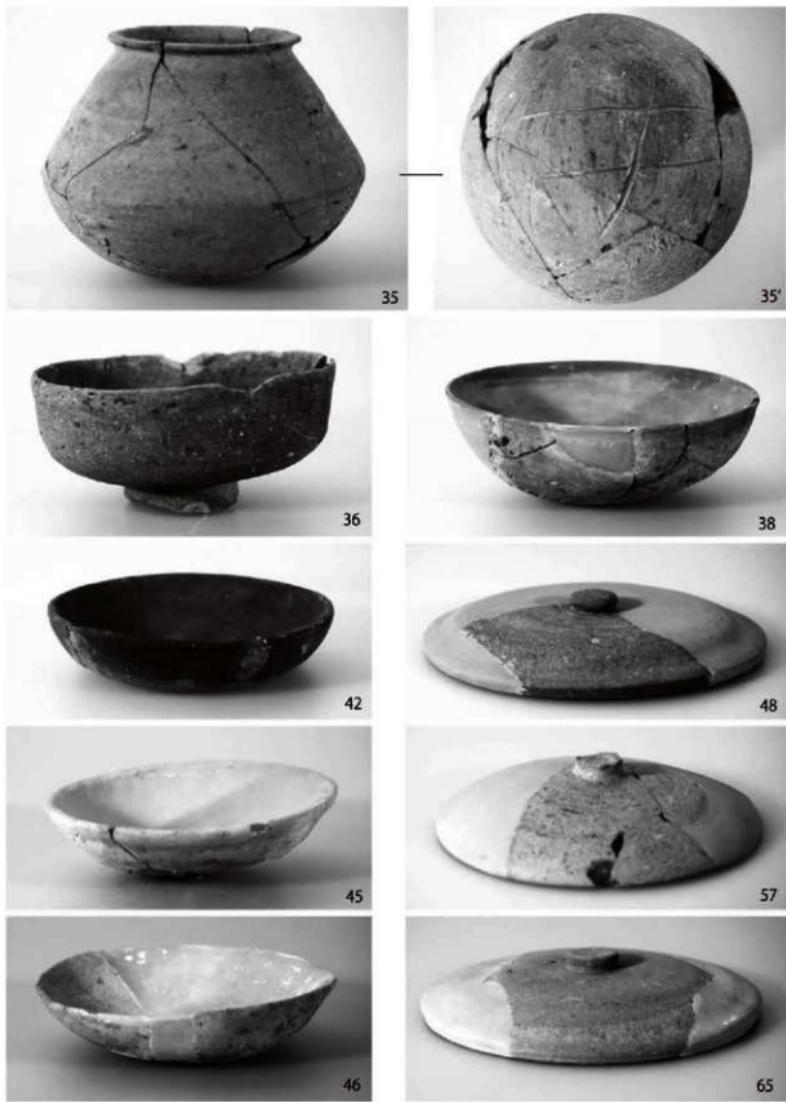


SX 2 馬齒出土状況

圖版 6



図版 7



土壤・ピット・包含層出土遺物

図版8



76



79



90



91



98



101



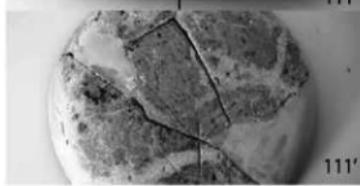
115



121



111



111'



128

包含層出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	こうだみなみいせき						
書名	甲田南遺跡						
副書名	診療所建設に伴う発掘調査概要報告（KDS88-1）						
卷次							
シリーズ名	富田林市文化財調査報告						
シリーズ番号	18						
編著者名	中辻亘 粟田薰 田川友美 青木昭和（編）						
編集機関	富田林市教育委員会						
所在地	〒584-8511 大阪府富田林市常盤町1番1号 TEL0721-25-1000（代）						
発行年月日	2022（令和4）年9月30日						

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
こうだみなみいせき	おおあざこうだ	27214	45	34°	135°	19881019	915 m <sup>2</sup>	記録保存調査 (診療所建設)
甲田南遺跡	大字甲田 (甲田三丁目)			29' 25"	35' 25"	～ 19881207		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
甲田南遺跡	集落跡	弥生～近世	溝 土坑 掘立柱建物 ピット	土師質土器 須恵器 製塙土器 馬齒 弥生土器	遺構の大半は7～8世紀という限られた時期に比定できる。 馬齒や製塙土器の出土から、農村的集落でない機能を有する可能性もある。

## 甲田南遺跡

-診療所建設に伴う発掘調査概要報告 (KDS88-1) -

発行年月日 2022年9月30日

編集・発行 富田林市教育委員会

住 所 富田林市常盤町1番1号

印 刷 明朗社